

ISSN 0385-0285

# 沖縄県立博物館紀要

## 第 15 号

1989

BULLETIN OF  
THE OKINAWA PREFECTURAL  
MUSEUM

No. 15

1989

沖縄県立博物館  
OKINAWA PREFECTURAL MUSEUM

# 沖縄県立博物館紀要

## 第 15 号

1989

沖 縄 県 立 博 物 館

## 目 次

金武 正紀：	沖縄における12・13世紀の中国陶磁器	1
KIN, S :	Chinese Ceramics of the 12th-13th Centuries Found in OKINAWA	
日越 国昭：	辺野喜川上流における防風樹林帶の構造変化 I	23
HIGOSHI, K :	Changes in Wind Protection Vegetational Structure of the Benoki River Head Waters in Okinawajima Island	
高良 松一：	琉球ガラス工芸の文化	37
TAKARA, S :	An Essay on Ryukyu Glasswork	
大城 學：	沖縄芸能と太鼓（序）	51
OSHIRO, M :	Introduction to the Drums of the Okinawa Performing Arts	
<資料紹介>		
津波古 聰：	田名宗經の木彫	69
<Short Note>		
TSUHAKO, S :	A Few Wooden Sculptures made by Soukei DANA	

## 沖縄における12・13世紀の中国陶磁器

金 正 紀

(沖縄県立博物館)

Chinese Ceramics of the 12th-13th Centuries Found in OKINAWA

Seiki KIN

(Okinawa Prefectural Museum)

### 一 は じ め に

沖縄出土の中国陶磁器で最も古いのは、西表島の古墓で見つかったと言われている長沙窯の「黄釉綠褐彩碗」である。これは唐代（およそ9世紀）の長沙窯碗と報告されている。<sup>(1)</sup>

この碗は墓荒しの手によって取り出されたものであり、その墓も明らかでない。伝世品の可能性が強いが、近年、西表島や石垣島の無土器遺跡から開元通宝<sup>(2)(3)</sup>が検出されており、開元通宝（621年初鑄）と一緒に持ち込まれた可能性もあり、今後の成果に期待したい。

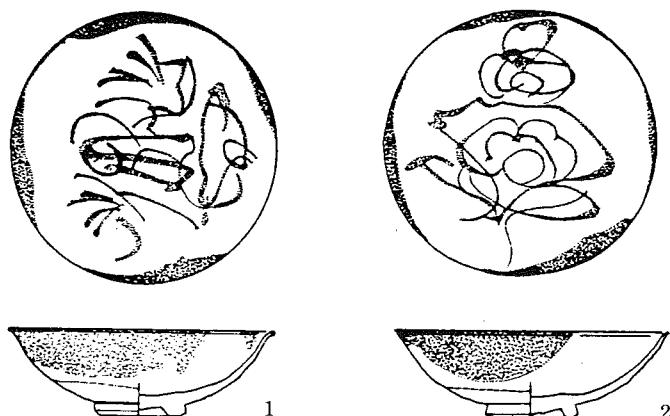


Fig. 1 長沙窯黄釉綠褐彩碗（西表古墓出土）〔東京国立博物館蔵〕（縮尺1/4）

考古学の発掘調査では、9・10世紀代の中国陶器はこれまでに1片も検出されていない。最も古いものは11世紀末～12世紀前半の白磁碗である。1978年1月、熱田貝塚の発掘調査で白磁玉縁碗、白磁端反碗などが検出され<sup>(4)</sup>、11世紀末～12世紀前半には確実に中国陶磁器が沖縄へ入っていることがわかった。その後の調査で、これらの古い中国陶磁器の出土例が増加した（第1表）。

沖縄出土の中国陶磁器については、多和田真淳<sup>(5)</sup>、三上次男<sup>(6)</sup>、亀井明徳<sup>(7)</sup>、矢部良明<sup>(8)</sup>、知念勇氏<sup>(9)</sup>など多くの研究者が発表している。しかしそれらは、沖縄各地で大量に出土する14～16世紀の中国陶磁器を中心であり、13世紀以前については概観程度にふれているだけである。そこで今回は、12・13世紀の中国陶磁器について具体例を呈示しながらまとめてみたい。なお、タイトルが「沖縄における12・13世紀の中国陶磁器」となっているが、11世紀末～12世紀前半とか、13世紀末～14世紀前半などとまたがって編年されているものは12・13世紀に含めた。

## 二 出土状況

12・13世紀の中国陶磁器については、1961年に多和田氏が、「沖縄列島土陶磁器出土地一覧表」の中で「南宋～元」とか「南宋」とか表現している<sup>(5)</sup>。写真や実測図がないのでどのタイプの中国陶磁なのかは明らかでないが、28遺跡採集の中国陶磁器198点について時代区分しており、特筆される。

1966年、嵩元氏が「ヒニ城の調査報告」に、はじめて実測図を掲載した<sup>(10)</sup>。その中に青磁櫛描文皿（珠光青磁）、青磁鎧蓮弁文碗、白磁口禿皿などが含まれており、13世紀の中国陶磁が明確にされた。それから12年後の1978年、熱田貝塚の発掘現場でヒニグスクの資料より古い中国陶磁器が検出され、沖縄における古い中国陶磁器が特に注目されるようになった。

その後、発掘調査や遺跡の分布調査などが進み、現在は第1表のような出土状況になっている。ここに掲載したのは白磁玉縁碗、白磁端反碗、青磁櫛描文碗・皿（珠光青磁）、青磁劃花文碗など明確に12・13世紀に編年される中国陶磁器が出土している遺跡だけをまとめた。しかし、それがすべて12・13世紀の遺跡ということではない。例えば、新里村（西）遺跡のように新里村（東）遺跡からの伝世品と考えられるものや、今帰仁城跡志慶真門郭のように主郭（俗称本丸）から投げ捨てられたものや伝世品と考えられるものもある。

なお、第1表に掲載したのは、報告されているものを中心としたが、未報告で個体数がわからないものについては◎印で示した。

第1表 沖縄における12・13世紀の中国陶磁器出土一覧

器種 遺跡名	白磁玉縁 碗I	白磁玉縁 碗II	白磁端反 碗	珠光青磁 碗皿	青磁割花 文碗	白磁擲目 文碗	白磁口折 碗	青白磁 合子	白磁口禿 碗皿	青磁鎬蓮 弁文碗	白磁ビロー スクタイプ 碗I	白磁ビロー スクタイプ 碗II
熱田貝塚	9	0	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0
大泊浜貝塚	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
新里村(東)遺跡	1	5	1	0	0	0	0	0	1	0	0	6
ピロースク遺跡	0	5	0	0	1	56	0	0	0	1	5	13
サーク原遺跡	1	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
伊良波東遺跡	0	8	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
伊波後原遺跡	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0
稻福遺跡	0	10	0	12	0	12	0	0	0	18	0	22
勝連城南貝塚	0	1	0	1	0	2	0	0	0	0	4	0
神山遺跡	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
拝山遺跡	0	1	0	1	8	15	0	0	4	11	26	0
佐敷グスク	0	2	0	0	0	0	1	0	0	3	5	0
越來グスク	0	2	0	0	0	0	0	0	0	4	0	0
大里伊田慶名原遺跡	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	10	0
親富祖遺跡	0	3	0	0	0	0	0	0	0	2	2	1
伊原遺跡	0	1	0	1	0	0	0	1	0	2	13	0
波名城古島遺跡	0	3	0	0	2	0	0	0	1	0	1	0
竿若東遺跡	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
喜友名山川原第6遺跡	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0
南山城跡	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0
阿波根古島遺跡	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
山原遺跡	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	2	0
真久原遺跡	0	1	0	0	0	2	0	0	0	3	4	0
新里村(西)遺跡	0	3	0	0	0	0	0	0	0	1	0	30
屋良グスク	0	◎		◎	◎	◎				◎		
ヒニグスク	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2	0
クードー遺跡	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0
我謝遺跡	0	0	0	0	3	4	0	0	1	3	1	0
野城遺跡	0	0	0	1	3	1	0	0	1	0	0	3
今帰仁城跡(志慶真門郭)	0	0	0	0	1	0	0	0	1	6	3	0
浦添城跡	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	1	0
フェンサ城貝塚	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0
高腰城跡	0	5	0	3	3	11	0	0	0	1	2	5
合計	12	65	6	20	22	105	1	1	2	8	59	81
												159

◎は未報告で個体数がはっきりしないもの

### 三分類

これまでに沖縄各地で検出された12・13世紀の中国陶磁器の分類と編年を試みた。復元資料が少なくて、分類資料として十分ではないが、その点は横田賢次郎・森田勉氏の「大宰府出土の輸入中国陶磁について—型式分類と編年について—」<sup>(11)</sup>の分類を参考にした。

#### 1. 白磁

12・13世紀の白磁として、玉縁碗（碗Iと碗II）、端反碗、櫛目文碗、口折碗、口禿碗と皿、ビロースクタイプ碗（碗Iと碗II）等と仮称して分類した。なお、碗と皿はセットとして分類した。

##### ① 玉縁碗

碗I 薄手で玉縁も小さい。口縁直下に釉垂れが多い。図上復元した3の資料は熱田貝塚出土である。<sup>(12)</sup> 碗IIよりは胴部が僅かに脹らむ器形で、高台割りが深い。薄い釉を内底から外側腰部まで施釉し、腰部から外底までは露胎である。熱田貝塚と大泊浜貝塚の資料は層序的に把握されており、好資料である。<sup>(13)</sup>

碗II 碗Iに比して厚手で、玉縁も大きいタイプである。腰部から口縁部へ逆八の字状に開き、高台割りが浅い。内底から外側腰部まで施釉し、腰部から外底までは露胎である。<sup>(14)</sup> 8の伊波後原遺跡出土と9の新里村（西）遺跡出土は、碗IIの代表的資料である。<sup>(15)</sup>

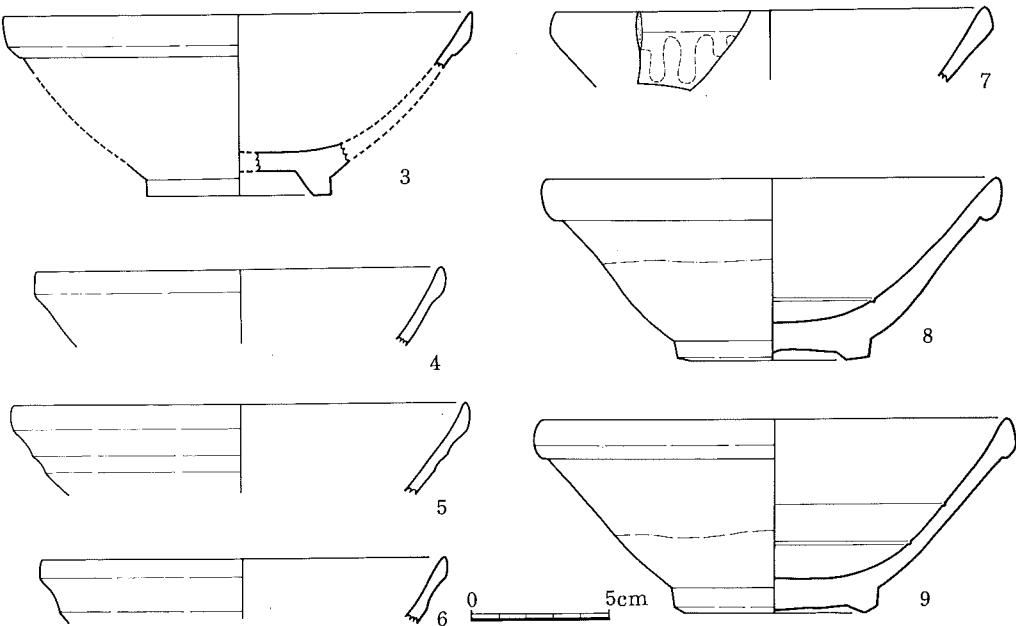


Fig. 2 白磁玉縁碗 I (3~7)・II (8・9) [熱田貝塚3~5, 大泊浜貝塚6, サーク原遺跡7, 伊波後原遺跡8, 新里村(西)遺跡9]

## ② 端反碗

薄手の碗である。口縁部は外反し、高台は薄くて高い。薄い釉を内底から高台脇まで施し、高台脇から外底までは露胎である。10と11は熱田貝塚出土の資料を図上復元したものである。熱田貝塚や大泊浜貝塚で玉縁碗Iとの共伴遺物であり、層序的にしっかりした資料である。

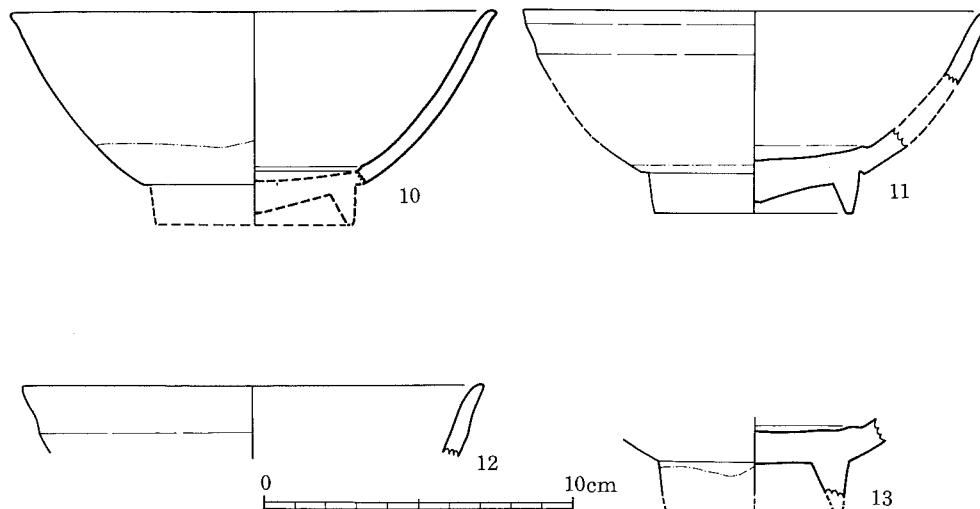


Fig. 3 白磁端反碗〔熱田貝塚 10・11, 大泊浜貝塚 12, 新里村(東)遺跡 13〕

## ③ 櫛目文碗

体部外面に櫛目文を施した高台の高い端反碗である。この櫛目文碗は佐敷グスクで1点検出されているだけである。「素地は堅緻で淡い灰白色を呈する。釉は緑色味を帯びた白色を呈し、全体的にうすく均一にかけられている」と報告されている。参考2は大宰府史跡出土で、横田・森田編年のV類2bにあたる。

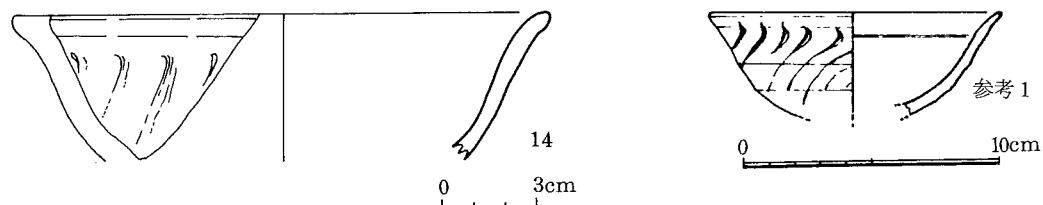


Fig. 4 白磁櫛目文碗〔佐敷グスク 14, 参考1は大宰府史跡〕

## ④ 口折碗

口縁部が外側に折れて、口唇は平坦に仕上げられている碗である。現在のところ伊原遺跡で検出された1点だけである。<sup>(17)</sup>今後の検出に期待したい。横田・森田編年のVII類3にあたると考えられる。

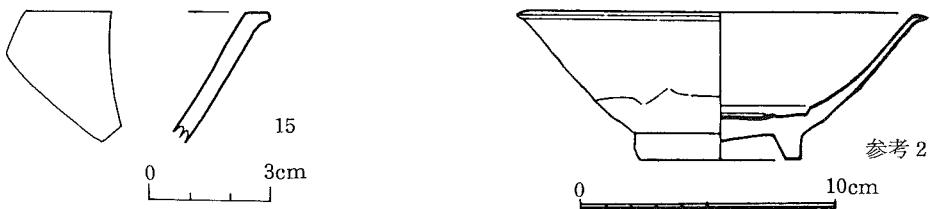


Fig. 5 白碗口折碗〔伊原遺跡 15 , 参考 2は大宰府史跡〕

##### ⑤口禿碗・皿

口禿には碗と皿がある。これまでの出土例を見ると碗より皿の方が多い。口唇部から内面頂部までの釉を掻き取って口禿としているのが最も大きな特徴である。

碗 I 直口口縁の小碗である。16は新里村(東)遺跡第II層の出土で、現在のところ最も古いと考えられる口禿碗である。高台は欠損しているが、施釉は碗 II とほぼ同じと考えられる。

碗 II 口縁部が外反する碗である。17の碗は今帰仁城跡出土で、復元資料としては現在のところ唯一である。外面の高台脇から外底までは露胎である。<sup>(18)</sup>

皿 I 浅皿で、口縁部は外反し、腰部に稜をもつ。全面施釉のあと口唇部から内面頂部までの釉を掻き取っている。底はベタ底だが、僅かに上げ底になっている。

皿 II 直口口縁の浅皿である。施釉方法は皿 I と同じである。底も皿 I と同じ。

皿 III 口縁部が外反する深皿である。施釉方法や底づくりは浅皿と同じである。

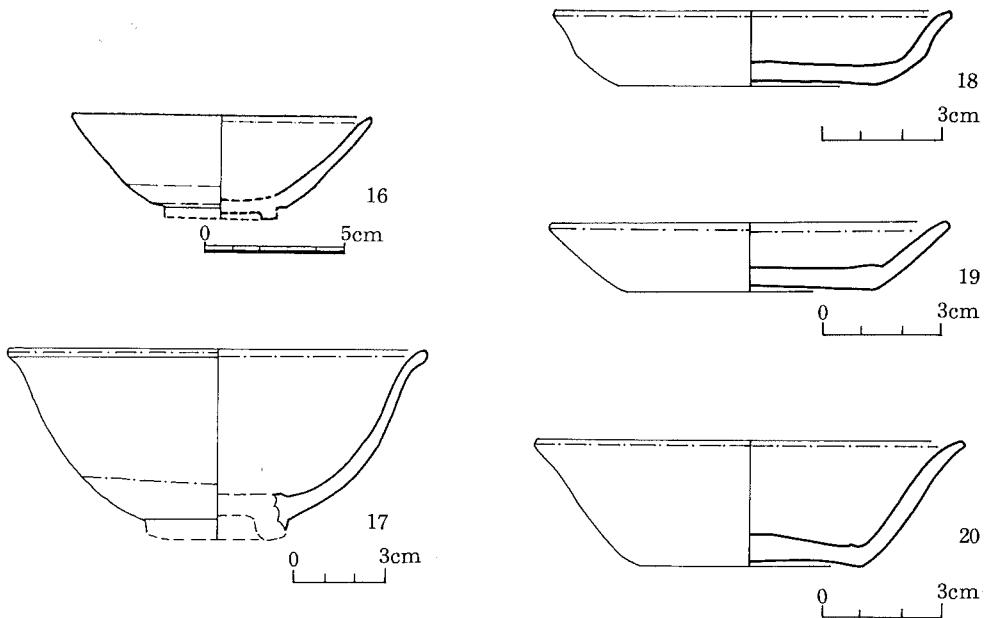


Fig. 6 白磁口禿碗・皿〔新里村(東)遺跡 16, 今帰仁城跡 17~20〕

#### ⑥ ビロースクタイプ碗

筆者はこの碗について、「基本的には厚手の内彎型碗である。素地は白色及び黄白色の微粒子である。畳付けは幅が広く、水平に切られている。器表面にはロクロ痕が稜線状に廻っているのが多い。釉は薄く、内底から外面の腰部か高台脇まで施釉されている。このビロースクタイプを口縁部の形態と圏線、文様などの有無によって2つに分けられる」とした。<sup>(20)</sup>

碗I 「基本的には内彎型であるが、口唇内端を丸くし、口唇直下の外面を指でおさえロクロをまわし、口唇部外端を尖らしている。内面上部には陰圏線を1本廻らし、下部には櫛描き文のあるものも見られる」。<sup>(20)</sup> 21と22が碗Iである。

碗II 「一般にビロースクタイプと呼んでいるのは、このタイプIIである。内彎する碗で、口唇は丸みをもち、口唇内端は内向し、稜を示すのが多い」。23と24が碗IIである。

このビロースクタイプが層序的に把握されたのはビロースク遺跡第II層（12世紀末～13世紀）、新里村（東）遺跡第II層（12世紀末～13世紀）、今帰仁城跡主郭第9層（13世紀末～14世紀初）などである。<sup>(21)</sup>

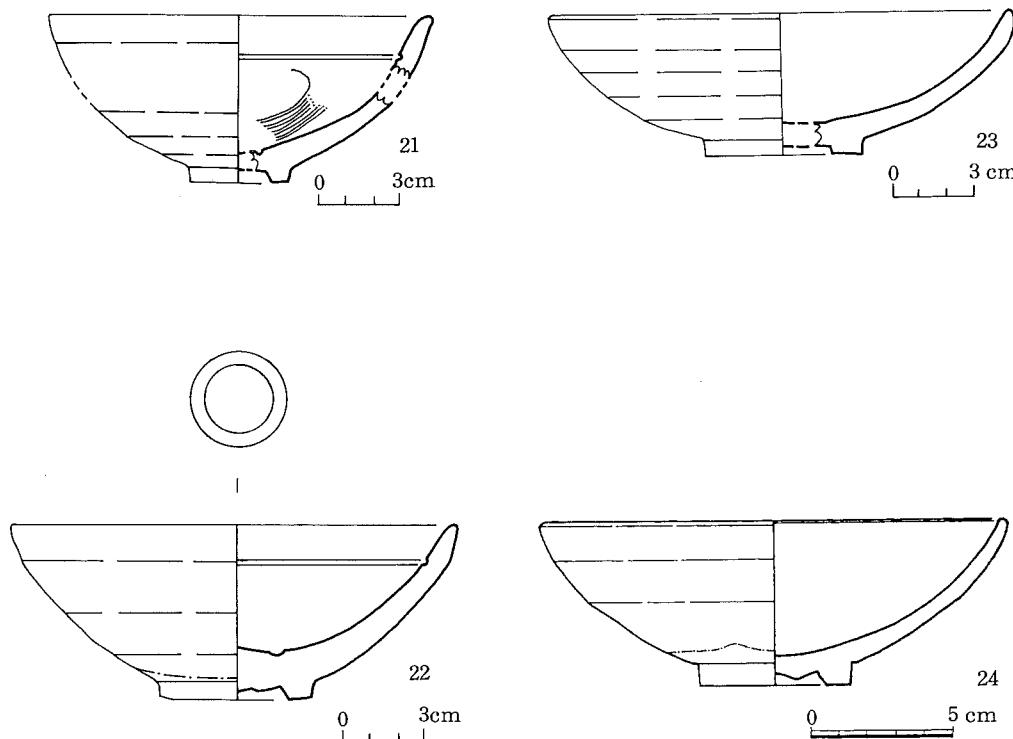


Fig. 7 白磁ビロースクタイプ碗 [ビロースク遺跡 21～23、新里村（西）遺跡 24]

## 2. 青磁

12・13世紀の青磁として、櫛描文碗・皿、劃花文碗、鎬蓮弁文碗、無文輪花碗、腰折杯、口折皿などと仮称して分類した。なお、器種はちがっても櫛描文の碗と皿のようにセットとして考えられるものはセットとして分類した。

### ① 櫛描文碗・皿

同安窯系の青磁で、一般に珠光青磁と呼ばれている一群である。櫛描文の出土例は10遺跡以上あるが、ほとんど1・2点の出土である。その中で稻福遺跡の碗12点と拝山遺跡の皿<sup>(22)</sup>8点は注目される。<sup>(23)</sup>

碗 復元資料がないので、大宰府史跡の資料(参考3)を掲載した。25は稻福遺跡の資料であるが、文様構成は参考3とほぼ同じである。内体面には籠や櫛などの施文具で花文などを描き、外体面には縦の櫛目文が施文されてるのが多い。しかし、内体面には文様があつて、外体面には文様がないものや、その逆などもある。高台で見ると若干の違いがあるので、高台造りにはいくつかの種類がある。

皿 皿は碗に比して出土例が多い。高台のないベタ底であるが、若干上げ底になっているのが多い。籠や櫛などの施文具を使って内底に施文してある。文様構成は碗の内面の文様とほぼ同じである。28は拝山遺跡出土の資料であるが、図上復元できる資料として数少ない資料の一つである。

### ② 劇花文碗

龍泉窯系の青磁で、劃花文とか刻花文とか呼ばれている一群である。現在のところ10遺跡で検出されているが、ビロースク遺跡の56点<sup>(21)</sup>、拝山遺跡の15点<sup>(23)</sup>などが注目される。

ビロースク遺跡出土の31と、クードー遺跡出土の32は全体が把握できる好資料である。31は内体面に蓮花を片切り彫りで表現している。32は同じく内体面に蓮弁を片切り彫りで描いている。31と32は文様の違いはあるが、器型や施釉方法などは同じである。脹らんだ腰部から口縁部へ直線的に開き、先端部は細くなり尖る。高台削りは浅く畳付は水平で広い。全体的に均整のとれた碗である。やや厚い釉を内底から高台外面まで施釉され、畳付から外底までは露胎である。

内底を見ると、39・40のように内底面と内体面の界に幅広の陰圈線を廻らし、内底が盛り上がった状態になっているのが多い。また、37・38のように内底に捻花を片切り彫りや平彫りしたもの、36のように「金玉満堂」の字があるもの、39・40のように籠で花文を彫ったもの、31・32のように文様のないものなどいろいろある。

35は我謝遺跡出土の資料であるが、口縁に刻みを入れた輪花碗である。劃花文碗で輪花碗になっているものは、大宰府史跡から出土している<sup>(11)</sup>。それを見ると、32のクードー遺跡出土の碗と同じ碗に刻みが入っている。したがって32タイプには輪花口縁と平口縁が

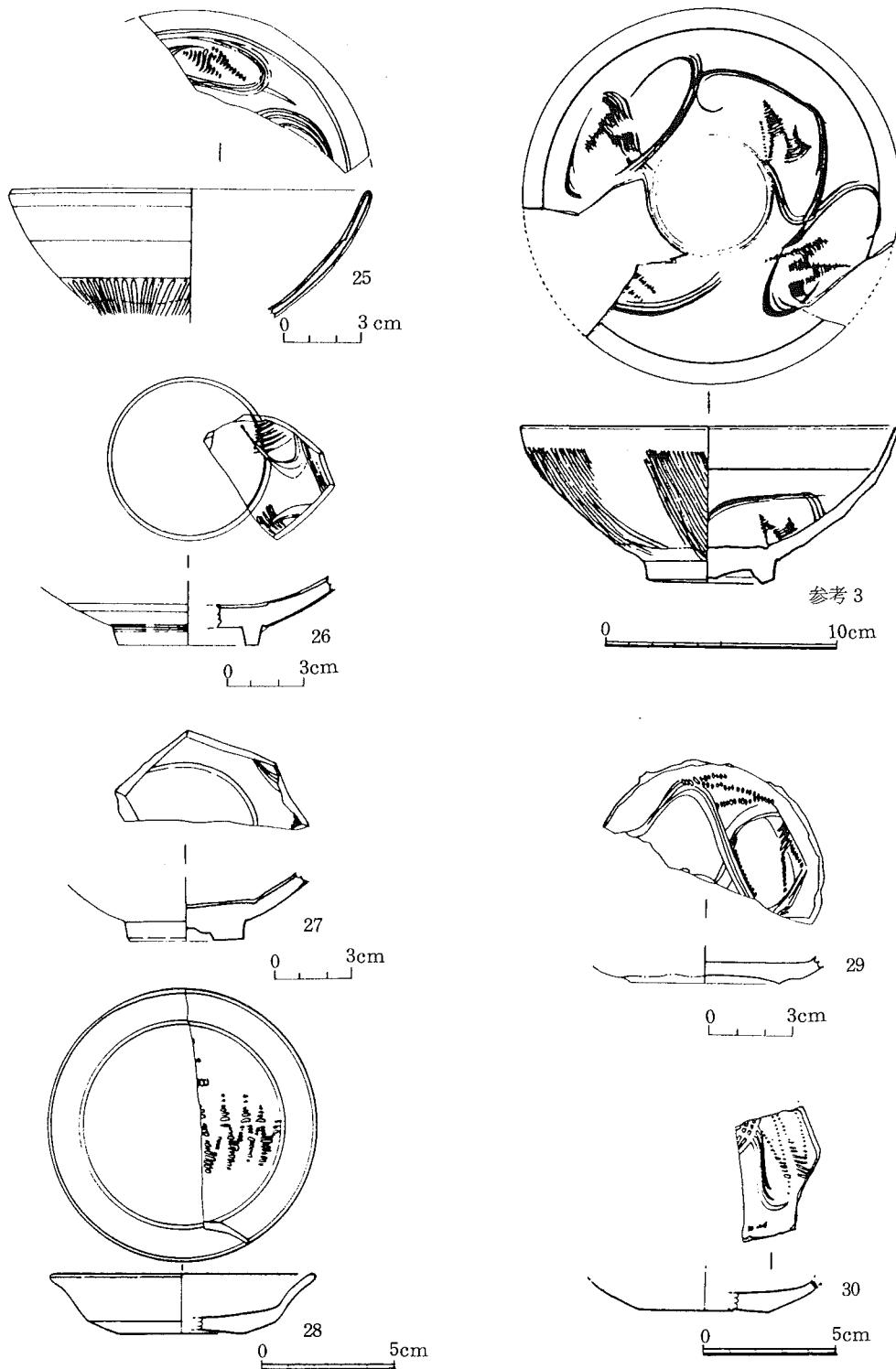


Fig. 8 青磁描文碗・皿 [稻福遺跡 25~27, 拝山遺跡 28・30, 野城遺跡 29, 参考 3 は大宰府史跡]

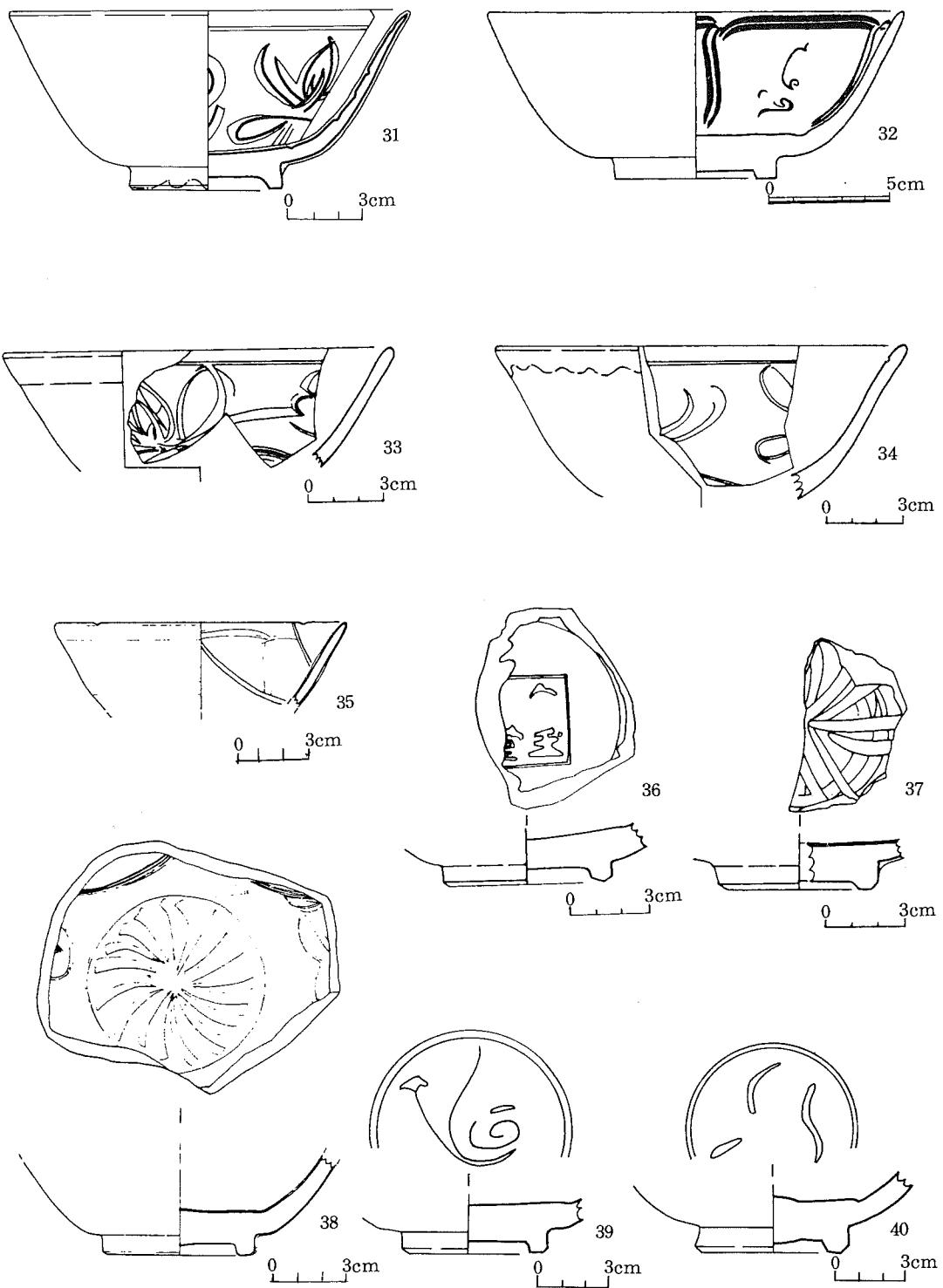


Fig. 9 青磁割花文碗 [ピロースク遺跡 31・39・40, クードー遺跡 32, 拝山遺跡 33・34・36・37, 我謝遺跡 35・38]

ある。

### ③ 鎬蓮弁文碗

龍泉窯系の青磁碗である。高台造りは劃花文碗とほぼ同じである。

41は今帰仁城跡主郭（俗称本丸）第9層（最下層）で検出された碗である。<sup>(27)</sup> 高台の内割りは浅く、底部の器肉が厚い。畳付は水平で幅が広い。内底から高台外面までは施釉されているが、畠付から外底までは露胎である。蓮弁の鎬は明瞭で、間弁もしっかりと描かれている。間弁をもつ鎬蓮弁は42・43の資料も同じである。

44・45はビロースク遺跡出土の資料であるが、薄手の直口口縁で釉も薄く、間弁は簡略化されている。このような資料の報告はほとんどないが、13世紀に納まる資料と考えられる。

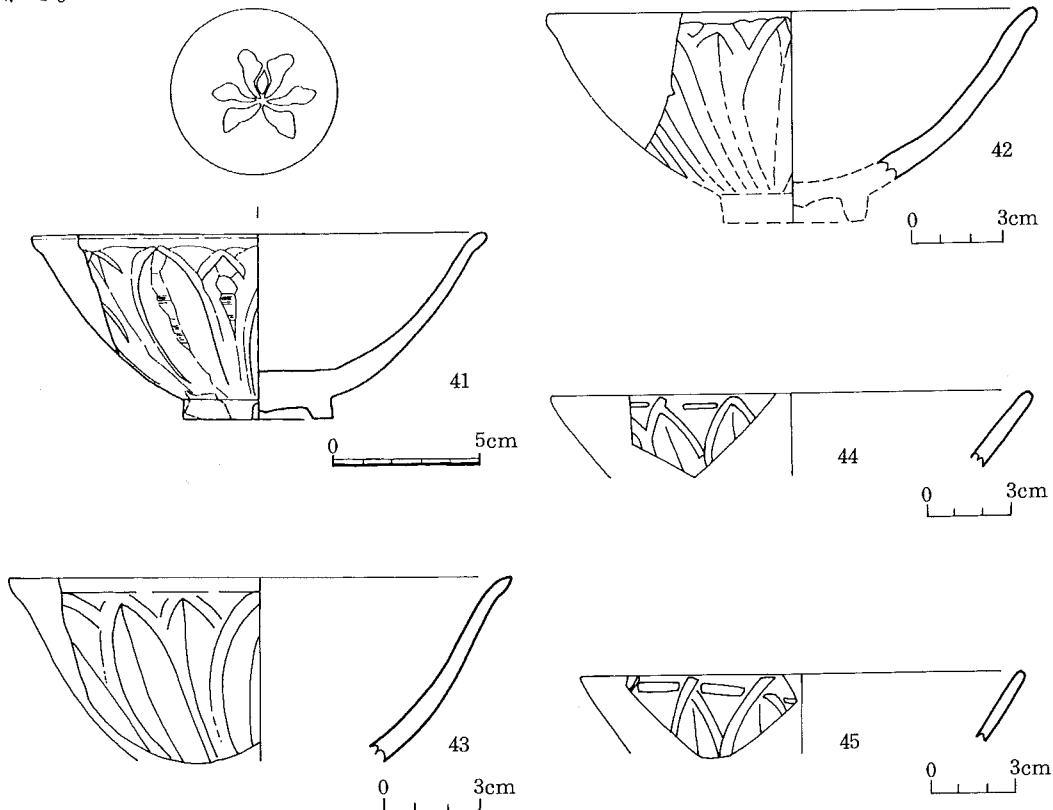


Fig. 10 青磁鎬蓮弁文碗〔今帰仁城跡 41・42, 佐敷グスク 43, ビロースク遺跡 44・45〕

### ④ 無文輪花碗

龍泉窯系で、口唇部に刻みを入れた輪花碗である。46は今帰仁城跡出土の資料であるが、全体的に器肉が薄く、高台も細く仕上げている。厚い青緑色釉を全体に施釉した後畠付の釉を削り取って露胎にしている。器形や釉調などから砧青磁の系統と考えられる。

無文輪花碗の出土例は少ないが、福岡市今津古墓出土<sup>(1)</sup>（13～14世紀）の無文輪花碗は

同じタイプと考えられる。

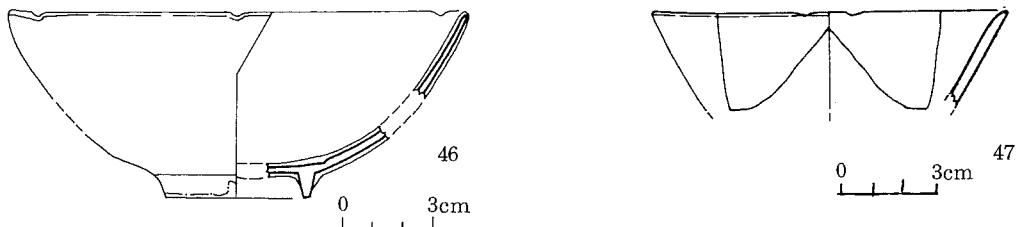


Fig. 11 青磁無文輪花碗〔今帰仁城跡 46, 我謝遺跡 47〕

⑤ 腰折杯

龍泉系の腰折杯である。腰の折れが明瞭である。口縁も口折に仕上げてある。施釉は無文輪花碗と同じで、畳付だけ露胎である。48は今帰仁城跡出土の資料である。<sup>(19)</sup>沖縄での出土例があまりないので、参考4として大宰府史跡出土の資料を掲載した。この腰折杯を横田・森田氏は杯III類の中では最も古く編年している。<sup>(11)</sup>

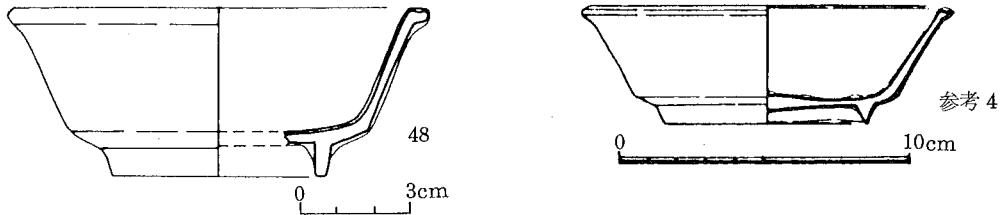


Fig. 12 青磁腰折杯〔今帰仁城跡 48, 参考4は大宰府史跡〕

⑥ 口折皿

龍泉窯系の口折皿である。特徴は口折の稜線が明瞭で、口縁外端を僅かにつまみ上げる。<sup>(19)</sup>施釉方法は無文輪花碗や腰折杯と同じで、畳付だけ露胎である。49～51は今帰仁城跡出土。

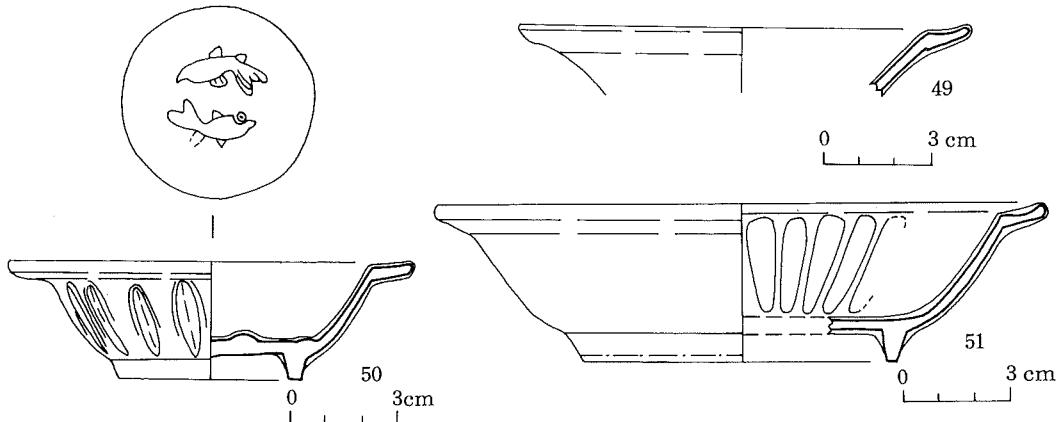


Fig. 13 青磁口折皿〔今帰仁城跡 49～51〕

この口折皿は3つに分けられる。

皿I 49の資料で、無文口折皿である。横田・森田編年の杯III類の3にあたる。<sup>(11)</sup>

皿II 50の資料で、外体面に鎧蓮弁文を廻らす。内底に貼付双魚文があるものもある。

横田・森田編年の杯III類の4にあたる。<sup>(11)</sup>

皿III 51の資料で、内体面に幅広の籠彫り蓮弁を廻らす。横田・森田編年にはないが、器型や施釉方法などから皿I・皿IIとほぼ同じ時期と考えられる。

### 3. 青白磁合子

景德鎮窯系の青白磁と考えられる。52は玻名城古島遺跡出土の資料であり、53は野城遺跡出土の資料である。<sup>(28)</sup> いずれも蓋の甲に印花花文が施文されている。二つの遺跡とも櫛描文（珠光青磁）が検出されているので、共伴遺物の可能性が強い。

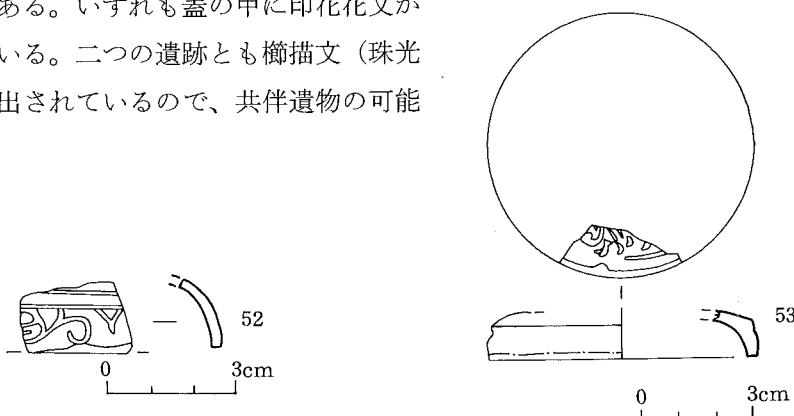


Fig. 14 青白磁合子蓋〔玻名城古島遺跡52, 野城遺跡53〕

### 4. 褐釉陶器

発掘調査で検出された褐釉陶器で、12・13世紀に編年できるものに壺、水注、鉢などがある。生産地は広東省佛山市奇石村桃源崗古窯などが有力視されている。<sup>(29)</sup>

壺 俗に南蛮壺とか呂宋壺とか言われているものはこの褐釉陶器壺である。四耳壺など耳付き壺が多い。<sup>(12)</sup> 54は熱田貝塚第Ⅲ層出土、<sup>(13)</sup> 55は新里村（東）遺跡第Ⅱ層出土、<sup>(14)</sup> 56は大泊浜貝塚第Ⅳ層出土、<sup>(15)</sup> 57は新里村（西）遺跡出土の資料である。口縁部は玉縁状に肥厚する。素地は薄い灰色で白色砂が混和されている。薄い黒褐釉が口縁部内面から外面底部脇まで施釉されている。施釉された釉は剥落が著しい。特に54は僅かに痕跡を残しているだけである。57は口径9cm、器高18cmの四耳壺で、肩部に白粉の目跡が廻っている。なお、新里村（東）遺跡出土の肩部破片に「清香」のスタンプ文字がある（PL. 2の6）。

水注 58は新里村（東）遺跡第Ⅱ層出土の資料である。口径10cm、高さが約25cmとして図上復元した。口縁は玉縁状に肥厚し、長頸状になってから胴部で張らむ器形と考え

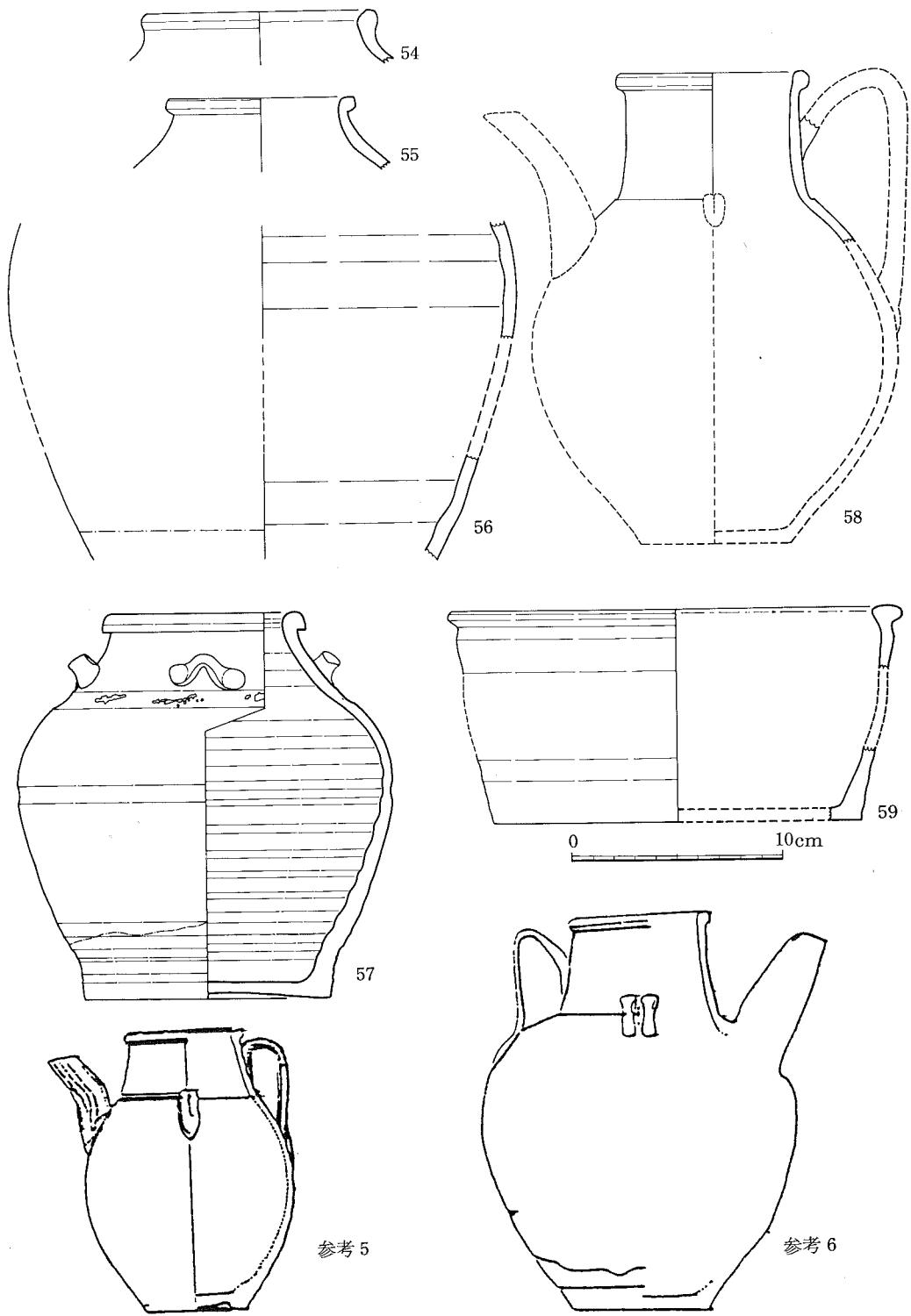


Fig. 15 褐釉陶器壺・水注・鉢〔熱田貝塚 54, 新里村(東)遺跡 55・58・59, 大泊浜貝塚 56, 新里村(西)遺跡 57, 参考 5 は博多聖福田寺跡〕

られる。把手の一部は残っているが、注口部は検出されていない。素地は薄い灰色で、白色砂が混和されている。黒褐色の薄い釉が頸部内面から外体面まで施釉されている。施釉された釉は剥落が著しい。

この水注と類似の水注として参考5(博多聖福寺)、参考6(熊本県福田寺跡)<sup>(30)</sup>の水注を掲載した。参考5は口縁が方形状の肥厚口縁で底が高台底である。参考6は口縁が玉縁状で底はベタ底である。今回の復元図58をベタ底にしたのは、新里村(東)遺跡と新里村(西)遺跡で出土した褐釉陶器の底部がすべてベタ底だったからである。

鉢59は新里村(東)遺跡出土<sup>(18)</sup>の資料である。口縁がT字状に肥厚し、内面だけに薄い褐釉を施しているのが大きな特徴である。矢部良明氏から「このような特徴をもつものに水指がある」との御教示を得たが、今回の資料は水指より低いので鉢として分類した。

#### 四 編 年

まず、編年の根拠になった遺跡の層序と共伴遺物を概観し、それに基づいて相対編年を試みることにする。

##### 1. 遺跡概観

###### ① 熱田貝塚

1978年、国道58号改良工事に伴う緊急発掘調査が実施された。本遺跡は標高約4mの砂丘上に形成されている。そこのハ地区(当時安富祖小中学校敷地内)第Ⅱ・Ⅲ層において白磁玉縁碗I、白磁端反碗、褐釉陶器壺、須恵器、滑石製石鍋(縦把手)、滑石製石鍋模造土器、開元通宝、刀子、勾玉などが共伴で検出された。<sup>(4)</sup>第Ⅱ層からは青磁無文外反碗の破片が2個検出されていることから若干の攪乱を受けているが、第Ⅲ層は未攪乱である。

これらのセット遺物は県内外から注目された。亀井氏は「…最近の沖縄県内における考古学的調査において、14世紀中葉以前の中国陶磁器を検出する遺跡が増加してきた。すでにこのことは多くの研究者が気づいていた点であるが1978年に行われた恩納村熱田貝塚の調査はその点で大きな意義を持っている」と熱田の意義を高く認めている。氏は発掘中に実見して「玉縁口縁の形態からみて本遺跡出土の白磁は12世紀代のものとみられる」と所見を述べている。

###### ② 大泊浜貝塚

1983~1985年、波照間島下田原地区において、下田原貝塚と大泊浜貝塚の範囲確認調査が実施された。大泊浜貝塚は砂丘に形成された無土器の貝塚である。その第4層(未攪乱層)において、白磁端反碗、褐釉陶器壺、須恵器、滑石製石鍋(縦把手)などがセット

で検出された<sup>(13)</sup>。この組み合せは熱田貝塚の組み合せと同じであり、編年の好材料である。熱田貝塚と同じように12世紀前半と考えられる。

### ③ 新里村（東）遺跡

1986年、竹富島の一一周道路工事に伴う緊急発掘調査が筆者らによって実施された。そのとき、新里村（東）遺跡第Ⅱ層で白磁玉縁碗ⅠとⅡ、白磁端反碗高台、白磁口禿小碗、白磁ビロースクタイプ碗、褐釉陶器壺・水注・鉢、須恵器、滑石製石鍋模造土器などが検出された。<sup>(18)</sup> この組み合せは12世紀後半～13世紀と幅があるようと考えられる。

### ④ ビロースク遺跡

1981・1982年、石垣市ビロースク遺跡の範囲確認調査が実施された。そのとき、第Ⅱ・Ⅲ層で白磁玉縁碗Ⅱ、青磁劃花文碗、青磁櫛描文皿（珠光青磁）、白磁ビロースクタイプ碗、須恵器、褐釉陶器壺などが共伴で検出された。<sup>(21)</sup> この組み合せから、12世紀末～13世紀と考えられる。

### ⑤ 今帰仁城跡主郭（俗称本丸）

1984～1986年、史跡今帰仁城跡の環境整備事業の一環として、主郭（俗称本丸）の発掘調査が筆者らによって実施された。そこの第9層（最下層）において、白磁口禿皿、白磁ビロースクタイプ碗、青磁鎬蓮弁文碗、青磁口折皿などが共伴で検出された。<sup>(27)</sup> まったく攪乱を受けていない層であり、13世紀末～14世紀初の中国陶磁器の組み合せと考えられる。

## 2. 編年試案

以上の層序的把握による中国陶磁器の組み合わせと、他の遺跡の報告書及び諸論文等を参考にして、つぎのような編年試案を作成してみた。実測図は上限と考えられるところに置いた。

① 熱田貝塚と大泊浜貝塚の出土状況から、白磁玉縁碗Ⅰ、白磁端反碗を12世紀前半と考えたい。しかし、大宰府史跡の資料で白磁玉縁碗Ⅰ・Ⅱが11世紀（1091年）の墨書銘を有する須恵器鉢と共に<sup>(11)</sup>、11世紀末まで上がる可能性はある。

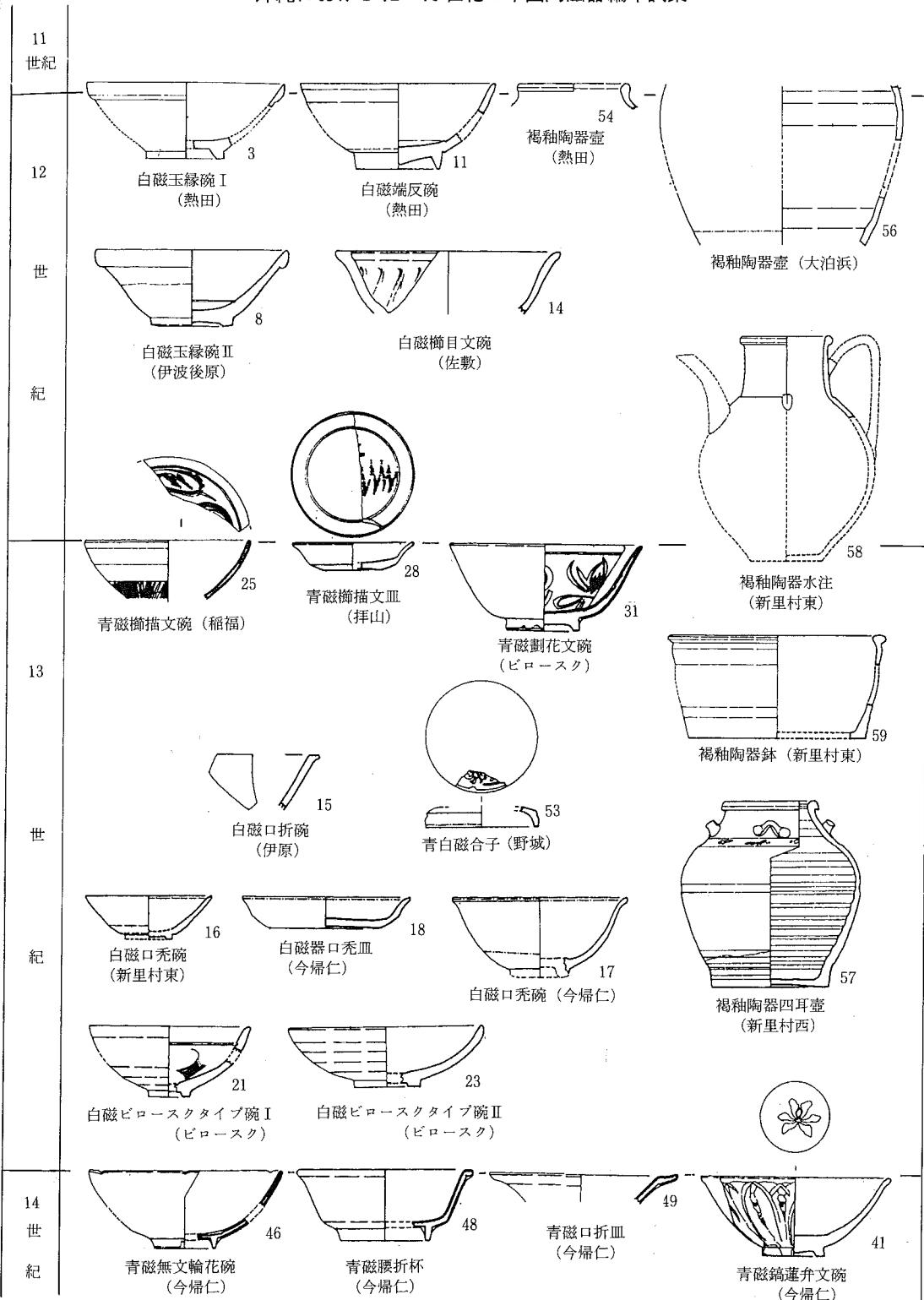
② 白磁玉縁碗Ⅱは12世紀後半～13世紀の遺物と共に出土しているのがほとんどで、12世紀前半まで上げることは現在のところむずかしい。12世紀後半としておく。

③ 褐釉陶器の壺は熱田貝塚と大泊浜貝塚から出土しており、この2点は12世紀前半と考えられる。しかし、このタイプの褐釉陶器は年代幅があり、14・15世紀まで続く。褐釉陶器の水注と鉢は新里村（東）遺跡の年代とあわせて12世紀末～13世紀と考えられる。

④ 青磁櫛描文碗・皿（珠光青磁）と青磁劃花文碗はビロースク遺跡、稻福遺跡、拝山遺跡などの出土状況（白磁玉縁碗Ⅱと共に）から12世紀末～13世紀と考えておく。

⑤ 白磁口禿碗・皿は新里村（東）遺跡出土の小碗が現在のところ最も古く、13世紀後

沖縄における12・13世紀の中国陶磁器編年試案



半と考えられる。口禿碗・皿の年代幅は13世紀後半～14世紀前半と考えておく。

⑥ 白磁ビロースクタイプ碗はビロースク遺跡第Ⅱ層、新里村（東）遺跡第Ⅱ層、今帰仁城跡主郭第9層から出土していることから、13世紀末～14世紀中葉と考えられる。

⑦ 青磁鎬蓮弁文碗は今帰仁城跡主郭第9層出土や、ビロースク遺跡の資料などから、13世紀末～14世紀前半と考えられる。

⑧ 青磁無文輪花碗は福岡市会津古墳出土<sup>(1)</sup>（13～14世紀）と同じタイプと考えられるので、13世紀末～14世紀前半とした。

⑨ 青磁腰折杯は大宰府史跡の資料と同じタイプであり、13世紀末～14世紀前半とした。<sup>(11)</sup>

⑩ 青磁口折皿は今帰仁城跡主郭第9層からも出土しており、また、大宰府史跡でも13世紀に出土していることから、13世紀末～14世紀前半と考えられる。

⑪ 白磁櫛目文碗、白磁口折碗、青白磁合子は層序的には明確でないが、共伴遺物を考えて配置した。

## 五 おわりに

熱田貝塚の発掘調査成果で筆者は「本遺跡は貝塚時代からグスク時代への移行期の遺跡で、今回の発掘で12世紀の沖縄がかなりわかつってきた」とグスク時代への移行期と位置づけた。その後、グスクの発掘調査等が数多く実施されているが、熱田貝塚相当期のグスクは現在のところ皆無である。

12世紀の中国陶磁器は白磁玉縁碗、白磁端反碗、褐釉陶器の3種類で、しかも出土量が僅かである（第1表）。中国貿易を考えるにはあまりに量が少ない。熱田貝塚<sup>(4)</sup>、サーク原遺跡<sup>(32)</sup>、大泊浜貝塚など<sup>(13)</sup>で白磁玉縁碗、滑石製石鍋、カムィヤキ系須恵器がセットで出土することから、九州経由で持ち込まれた可能性が考えられる。それは、博多港を中心とする博多遺跡群から白磁玉縁碗が多く出土することと関係があるのでなかろうか。この点について亀井氏は「……中国陶磁器は、日本（九州）商人経由で沖縄にもたらされたと想定するのは価格の点で不自然であろう」と否定的に考えている。<sup>(7)</sup>

12世紀末～13世紀初、沖縄のグスク時代が始まる。それと同時に、13世紀の青磁、白磁、褐釉陶器などの中国陶器が多く入ってくる。知念氏は「その出土状況は琉球國中山王が中国との進貢貿易を開始する以前にすでに交易関係にあったことを立証していると考えられる」と述べている。13世紀から14世紀中葉までの私貿易が、1372年の進貢貿易へと発展していくと考える点では筆者も同じである。

亀井氏は14世紀中葉以前の沖縄と中国との私貿易について3つの貿易形態を想定した。

A) 宋・元商船が、本島、宮古、八重山の主たる地に来航し、有力な按司等と交易。

B) 各地の有力按司等が宋・元へ交易船を発遣して交易。

C) 九州を中心とする日本商船の来航による交易。

そして、その中で、「沖縄の中国陶磁の入手方法のうち蓋然性の高いのは、AかBとなる」と述べている。<sup>(7)</sup> 上限を12世紀末～13世紀とするならば説得力のある想定である。

以上概観したように、沖縄における12・13世紀の中国陶磁器についてはいろいろな問題があり、その解明は今後の調査研究にかかっている。今回の分類と編年試案は、これまで筆者が直接に発掘調査した遺跡の資料を中心にまとめてみた。資料が不十分であり、これから補足、修正等が多いと思われるが、今後の中国陶磁研究に少しでも役立てば幸いである。諸学兄の御批正を得たい。

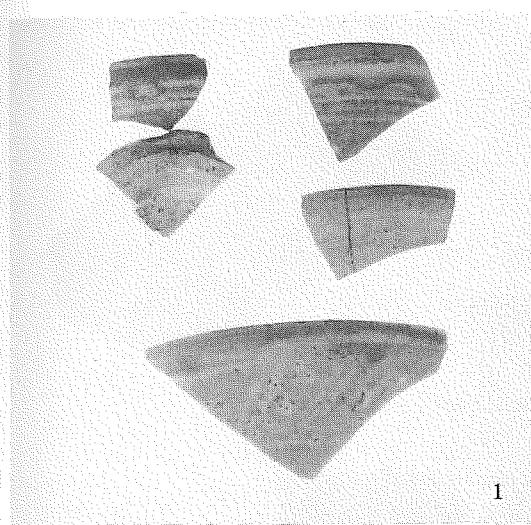
最後に沖縄出土の中国陶磁器について御教示くださった長谷部樂爾、亀井明徳、矢部良明、森田勉氏および写真、実測、トレース等で協力を得た宮里末廣、金城亀信、高良美千代の諸氏に謝意を表する。

- 註1、長谷部樂爾、矢部良明他『日本出土の中国陶磁』 東京国立博物館 1978  
2、金武正紀「仲間第一貝塚の開元通宝について」『南島考古だより』第13号 1974  
3、阿利直治他『崎枝赤崎貝塚』石垣市教育委員会 1987  
4、金武正紀『恩納村熱田貝塚発掘調査ニュース』沖縄県教育委員会 1978  
5、多和田真淳「琉球列島に於ける遺跡の土器、須恵器、磁器、瓦の時代区分」『文化財要覧』琉球政府文化財保護委員会 1961  
6、三上次男『陶磁貿易史研究 上』－三上次男著作集1－ 中央美術出版 1987  
7、亀井明徳『日本貿易陶磁史の研究』同朋社出版 1986  
8、矢部良明「日本出土の元様式青花磁器について」『南島考古』第4号 沖縄考古学会 1975  
9、知念 勇「沖縄出土の中国陶磁について」『第1回中琉歴史関係国際学術会議論文集』中琉文化経済協会出版 1987  
10、嵩元政秀「ヒニ城の調査報告」『琉球文化財調査報告書』琉球政府文化財保護委員会 1966  
11、横田賢次郎・森田 勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『研究論集4』九州歴史資料館 1978  
12、沖縄県教育委員会文化課保管の熱田貝塚出土品  
13、金武正紀他『下田原貝塚・大泊浜貝塚』沖縄県教育委員会 1986  
14、当真嗣一「石川市伊波後原遺跡調査概報」『南島考古』第4号 沖縄考古学会 1975  
15、沖縄県教育委員会文化課保管の新里村（西）遺跡出土品  
16、当真嗣一他『佐敷グスク』佐敷村教育委員会 1980  
17、島袋 洋他『伊原遺跡』沖縄県教育委員会 1986  
18、沖縄県教育委員会文化課保管の新里村（東）遺跡出土品  
19、金武正紀・宮里末廣他『今帰仁城跡発掘調査報告I』今帰仁村教育委員会 1983  
20、金武正紀「ビロースクタイプ白磁碗について」『貿易陶磁研究』第8号 日本貿易陶磁研究会 1988  
21、金武正紀・阿利直治他『ビロースク遺跡』石垣市教育委員会 1983  
22、当真嗣一他『稻福遺跡発掘調査報告書』沖縄県教育委員会 1983  
23、座間味政光他『挾山遺跡』沖縄県教育委員会 1987

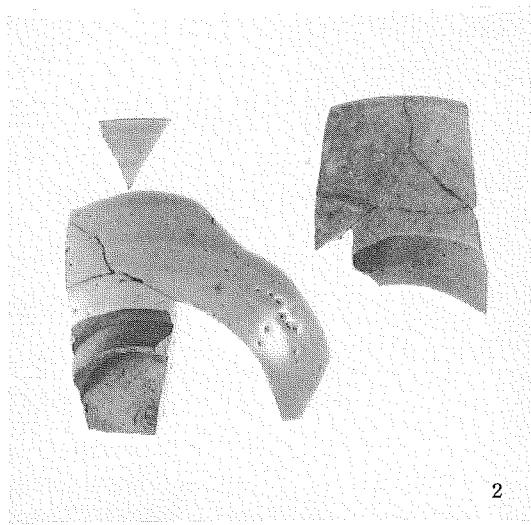
- 24、盛本 獻他『大牧遺跡・野城遺跡』城辺町教育委員会 1987
- 25、沖縄県教育委員会文化課保管のクードー遺跡表面採集資料
- 26、大城 慧他『我謝遺跡』西原町教育委員会 1982
- 27、今帰仁村教育委員会保管の今帰仁城跡主郭（俗称本丸）出土品
- 28、金城亀信他『具志頭村の遺跡』具志頭村教育委員会 1986
- 29、「広東石湾古窯跡調査」『考古』 中国科学出版社 1979
- 30、岡崎 敬「福岡（博多）聖福寺発見の遺物について一大陸舶載の陶磁と銀鋌」『九州文化史研究所紀要 13』 1968
- 31、『中国陶磁の美－熊本県出土の中国陶磁－』熊本県立美術館 1980
- 32、安里嗣淳・島弘他『砂辺サーク原遺跡』沖縄県教育委員会 1987
- 33、折尾 学・森本朝子他『博多Ⅱ－図版編一』福岡県教育委員会 1982

なお、上記以外に「中国陶磁器出土一覧」（第1表）に使った報告書等はつぎのとおり。

- 安里嗣淳・島弘他『伊良波東遺跡』豊見城村教育委員会 1987  
 安里嗣淳他『勝連城跡』勝連町教育委員会 1984  
 島袋友道他『郷土』第17号 沖縄大学学生文化協会 1979  
 宮城利旭・宮里信勇他『越來城』沖縄市教育委員会 1988  
 湖城 清『大里伊田慶名原遺跡』糸満市教育委員会 1983  
 下地安広『親富祖遺跡』浦添市教育委員会 1983  
 大城 慧他『竿若東遺跡緊急発掘調査報告』 1978  
 呉屋義勝他『喜友名遺跡群』宜野湾市教育委員会 1984  
 湖城 清『南山城跡第一次緊急発掘調査概要』糸満市教育委員会 1984  
 「阿波根古島遺跡」の表面採集資料は沖縄県教育委員会保管  
 「山原遺跡」出土の資料は石垣市教育委員会保管  
 金城亀信他『牧港貝塚・真久原遺跡』沖縄県教育委員会 1985  
 「屋良グスク」の出土品は沖縄県教育委員会で一時保管中  
 当真嗣一・下地安広他『浦添城跡発掘調査報告書』浦添市教育委員会 1985  
 友寄英一郎・嵩元政秀「フェンサ城貝塚調査概報」琉球大学法文学部紀要 1969  
 「高腰城跡」出土の資料は城辺町教育委員会保管



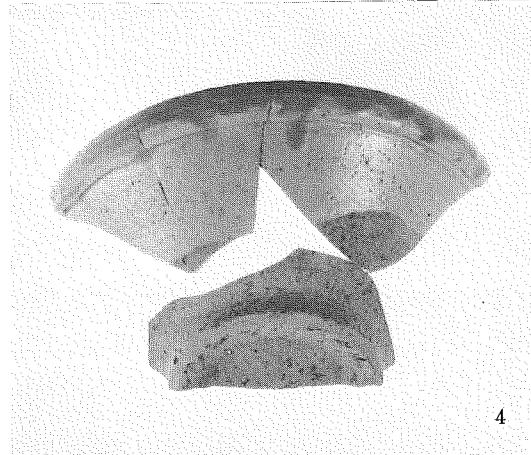
1



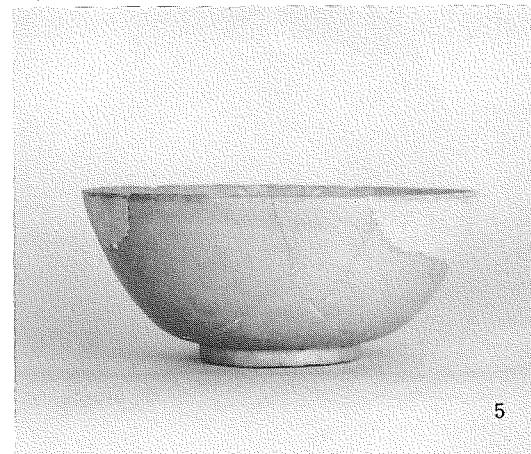
2



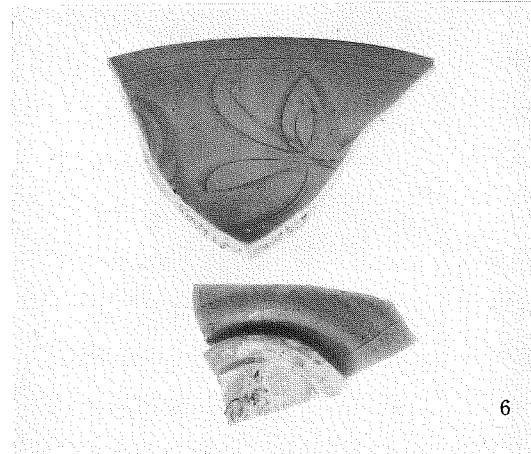
3



4



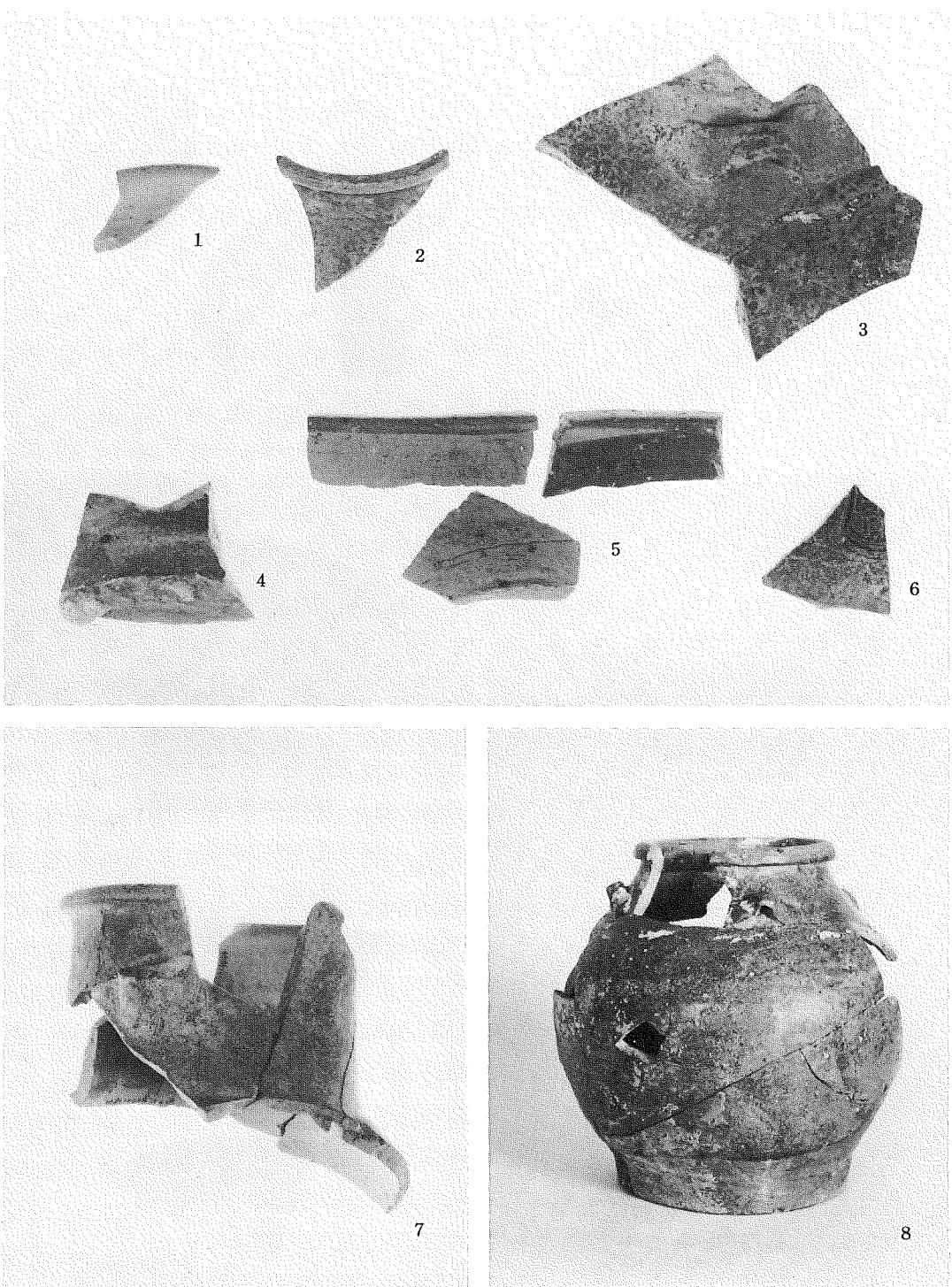
5



6

PL. 1 白磁碗 [1:玉縁碗 I (熱田), 2:端反碗 (熱田), 3:玉縁碗 II (伊波後原),  
4:玉縁碗 II (新里村西) ]

青磁碗 [5:割花文碗 (クードー), 6:割花文碗 (ビロースク) ]



PL. 2 褐釉陶器 [熱田貝塚1, 新里村(東)遺跡2~7, 新里村(西)遺跡8]

[1~4・6・8:壺, 5:鉢(上左は外面, 上右は内面, 下は底外面), 7:水注]

## 辺野喜川上流における防風樹林帯の構造変化 I

日 越 国 昭

(沖縄県立博物館)

Changes in Wind Protection Vegetational Structure of the  
Benoki River Head Waters in Okinawajima Island

Kuniaki HIGOSHI

(Okinawa Prefectural Museum)

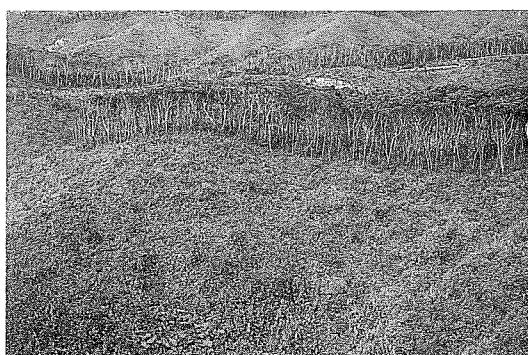
### はじめに

辺野喜川上流域は、1980年代はじめまではオキナワシキミースダジイ群集に属するうっそうとした森林に覆われていた。その後ダム建設工事等に伴う伐採などもあり、今では分水界付近まで伐採が進行している。

現在この場所では、分水界から発するいくつかの尾根に、防風などの目的で帶状に残された、長さ数100m、幅10m~20mの樹林帯がいくつか見られる。

他の地域の古い防風樹林帯では、個体生態的には、樹幹の白化、個体上部の枯死、個体全体の枯死、倒木や陽地性樹種の侵入等がみられる。また、群落的には特に高木層や亜高木層の植被率の低下と、低木層や草本層の植被率の増加、群落全体の生活形の低下、陽地性群落への変化がみられ、その目的である防風などの効果をあげてないものが見られる。

これまで、帶状に残された森林の群



辺野喜川上流伐採地。帶状に残された防風樹林帯



防風樹林帯の先端部・西側から見た様子

にはほぼ同様の調査方法で調査し、1987年の結果から約1年後の変化について比較・検討した。

落生態調査は、1987年9月～10月に辺野喜川上流地域の防風樹林帯において調査した日越・千木良（1988）がある。

この報告は、伐採後3年の防風樹林帯の構造について、樹林帯の先端から0m、5m、20m、80mの毎木調査と横断および縦断の植生断面模式図を作成したものである。

今回の調査は、防風樹林帯の変化の経緯をみるために、日越・千木良（1988）の調査した地域を1988年12月

### 1. 調査地の概況

調査地の概況については、日越・千木良（1988）とほぼ同様であるので省略する。

### 2. 調査方法

調査は日越・千木良（1988）と同様の方法で実施した。すなわち、基点より0m・5m・20m・80mの各横断の調査区と、基点より0m～40mの縦断の調査区の毎木調査を実施した。毎木調査は、横断・縦断各調査区の、高木層、亜高木層、低木層に出現する全個体の種名、胸高直径、樹高や各個体の活力度の変化、すなわち個体の生死・最上部の生きた枝の高さ（以下最上生枝高とする）・枯死して倒れているかどうかなどを調査した。

また、その概要を知るために横断調査区と縦断調査区について、2mの幅に出現する植生の断面模式図を作成した。

### 3. 調査結果

#### 1. 横断調査区の毎木調査結果

各横断調査区において、1987年の低木層以上の胸高直径、樹高、最上生枝高すなわち個体上部が枯れ下部はまだ生きている個体の最上部の生きた枝の高さの調査結果と、1988

年の最上生枝高などの変化を示したもののが表-1である。

表中で、個体番号1～17までは防風樹林帯の先端で一番北側の基点から0mの調査区、18～43は基点から5mの調査区、44～68は基点から20mの調査区、69～116は基点から80mの調査区である。また、1987年の最上生枝高の結果および1988年のその変化の中で正は正常個体、枯は枯死個体、枯倒は枯死し倒れた個体を示している。

表-1に示すとおり、1987年の調査時点では正常個体であった81個体のうち、1988年には枯死したり枯死して倒木になったりしたものが5個体、正常個体であったものが上部枯死個体になった個体が26個体、上部枯死の高さが低くなったものが8個体あった。また、1987年の枯死個体18個体のうち倒れたものが10個体あった。

表-1の横断調査区における1987年と1988年の毎木調査の結果をまとめたものが表-2である。

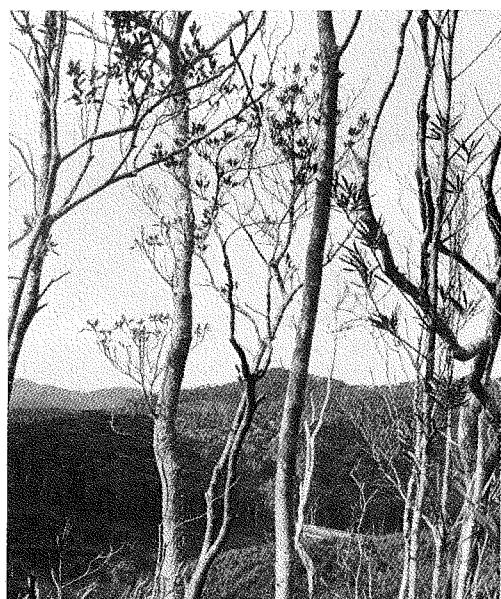
表-2によると、高木層、亜高木層、低木層に合計121個体出現し、そのうち1987年には81個体(67%)が正常個体、22個体(18%)が上部枯死個体、18個体(15%)が枯死個体であった。それに対して1988年は、54個体(45%)が正常個体、43個体(36%)が上部枯死個体、24個体(20%)が全体枯死個体であった。正常個体が減少し、上部枯死個体と全体枯死個体が増加している。

階層別にみると高木層の正常個体が1987年の95%に対し1988年が79%、亜高木層が58%に対して36%、低木層が68%に対して45%といずれも減少している。特に亜高木層において正常個体の割合が減少し、上部枯死個体と全体枯死個体の割合が増加している。

調査区別に比較すると、1987年の0mの調査区全体の正常個体の割合が41%であったのに対し、1988年では35%であった。同様



先端部北側からみた様子



5m調査区より北側をみた様子

表-1 各横断調査区における1987年と1988年の毎木調査結果 (単位 cm)

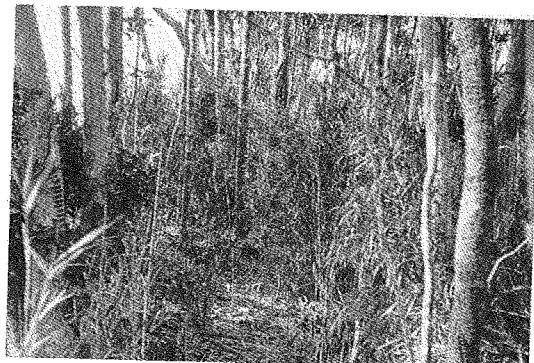
調査区番号	個体番号	種名	胸高直径	樹高	最上生長枝高	最高等生長化	1988枝上変化	54	ツゲモチ	1.0	253	正正正正正	正215
①	1	カクレミノ	1.0	180	正	正	55	モッコク	1.0	361			
	2	枯	1.5	420	枯	枯倒	56	カクレミノ	1.0	361			
	3	枯	4.0	565	枯	枯倒	57	ヒメユズリハ	3.0	398			
	4	枯	1.0	310	枯	枯倒	58	オキナワニキミ	1.5	451	正正正正正	364	
	5	枯	1.0	360	枯	枯倒	59	シバニッケイ	9.2	761	正正正正正	正枯倒枯	
	6	モッコク	4.5	600	427	337	60	枯	1.2	365	正正正正正	枯倒枯倒枯	
	7	カクレミノ	1.0	200	正	正	61	枯	2.0	370			
	8	モッコク	9.0	735	正	正	62	イタジイ	12.3	614	95	95	
	9	シバニッケイ	1.0	245	130	130	63	アデク	1.6	235	60	60	
	10	ヒメユズリハ	1.0	300	90	20	64	コバンモチ	1.5	259	125	125	
	11	シロミミズ	7.0	525	270	枯	65	オキナワニキミ	9.0	693	正正正正正	正	
	12	オキナワシャリンバイ	1.5	490	正	正	66	イヌマキ	2.3	378			
	13	イタジイ	10.0	825	正	正	67	イジュ	15.0	890	正正正正正	正正正正正	
	14	モッコク	8.0	735	正	485	68	リュウキュウモチ	2.3	420			
	15	カクレミノ	1.0	340	正	正							
	16	枯	8.0	415	枯	枯倒							
	17	枯	5.0	570	枯	枯倒							
②	18	イヌマキ	1.0	235	正	正	69	モチノキ	19.0	860	正正正正正	正正	
	19	リュウキュウモチ		300	正	正	70	イヌマキ	4.8	542			
	20	イタジイ	6.5	755	18	18	71	モッコク	4.1	481		420	
	21	リュウキュウモチ	10.5	720	正	正	72	リュウキュウモチ	6.8	767	正正正正正	正	
	22	サザンカ	5.0	515	10	枯	73	ヒメユズリハ	7.7	579	560	560	
		"	3.0	475	正	枯	74	枯	8.1	676			
	23	枯	1.0	225	枯	枯		"	10.0	550			
	24	枯	3.0	310	枯	枯倒							
	25	モッコク	1.0	230	正	99	75	イタジイ	18.0	723			
	26	オキナワシキミ	0.5	705	正	枯	76	コバンモチ	8.2	682			
	27	枯	3.0	410	枯	枯	77	イタジイ	17.0	924			
	28	イヌマキ	1.5	490	正	405	78	ヒメユズリハ	14.2	690			
	29	アデク	2.5	280	105	105	79	アデク	2.0	263			
	30	イヌマキ	4.5	440	正	正	80	モッコク	1.6	335			
	31	オオバナハイノキ	8.0	760	正	正	81	カクレミノ	3.7	462			
	32	イヌマキ	2.5	310	正	正	82	タイミンタチバナ	1.3	305	59	59	
	33	コバンモチ	3.5	460	正	枯倒	83	アデク	3.7	358	58	23	
		"	1.0	320	正	105	84	イヌマキ	5.7	589	正		
	34	シシアクチ	3.0	410	正	140折	85	イタジイ	5.2	767	45		
	35	枯	2.0	430	枯	枯倒	86	タイミンタチバナ	8.0	515			
	36	イタジイ	17.0	740	正	正	87	リュウキュウモチ		420			
	37	オオバナハイノキ	8.0	770	正	正	88	コバンモチ	6.0	650			
	38	コバンモチ	4.5	480	339	75	89	モッコク	11.5	690			
	39	シシアクチ	1.0	230	83	10折	90	コバンモチ	4.0	490			
	40	イジュ	10.0	730	正	正	91	枯	1.7	465			
	41	ムツチャガラ	1.5	430	正	210	92	タイミンタチバナ	3.7	444		20	
	42	モッコク	8.0	670	正	正	93	リュウキュウモチ		440			
	43	リュウキュウモチ	6.5	515	正	正	94	アデク	2.5	309	253		
③	44	枯	7.0	655	枯	枯	95	モッコク	3.3	440		373	
	45	シバニッケイ	5.0	606	10	10	96	タイミンタチバナ	1.7	313			
		"	3.0	197	正	135折	97	コバンモチ	3.5	381	163		
	46	モッコク	1.0	160	75折	75折	98	モクレイン	3.5	338	263		
	47	モッコク	3.4	542	正	正	99	アデク	1.0	263	187		
	48	シマミサオノキ	1.0	151	正	155	100	コバンモチ	1.2	237	170	45	
	49	アデク	1.0	283	173	162	101	イジュ	1.5	264			
	50	オオバナハイノキ	11.3	935	正	正	102	枯	2.6	420			
	51	コバンモチ	9.0	620	50	50	103	ヒメユズリハ	13.2	690			
		"	2.0	442	正	241	104	モッコク	1.4	342			
	52	ヒサカキ	1.8	350	正	正	105	コバンモチ	1.1	470	89	5	
	53	サザンカ	5.0	752	正	正	106	イタジイ	2.0	395	3		

表中の正は正常個体、枯は枯死個体、枯倒は枯死倒木

に5m調査区では57%に対して43%、20m調査区では66%に対して48%、80m調査区では82%に対して49%であった。いずれの調査区においても正常個体が減少し、上部枯死個体と全体枯死個体が増加している。

0m、5m、20m、80mの各横断調査区で、2mの幅で1987年調査と同様に植生断面の様子をスケッチした。その結果を、図-1から図-4に示す。

これらの図によると、1987年調査時に比較して、各横断調査区内の上部枯死や全体枯死個体、枯倒木が増加している。特に先端の0m調査区では、極端に枯死木や枯倒木の割合が増加している。



基点より 40m の林内リュウキュウチクが繁茂している

表-2 各横断調査区における1987年と1988年の毎木調査結果

調査区番号	個体数	①(0m)			②(5m)			③(20m)			④(80m)			合計		
		正常個体数	上部枯死数	全体枯死数	正常個体数	上部枯死数	全体枯死数	正常個体数	上部枯死数	全体枯死数	正常個体数	上部枯死数	全体枯死数	正常個体数	上部枯死数	全体枯死数
高木層	1987年 (%)	3 100	0 0	0 86	6 14	1 0	0 100	4 0	0 0	0 100	5 0	0 0	0 0	18 95	1 5	0 0
	1988年 (%)	2 67	1 33	0 58	5 14	1 29	1 100	4 0	0 0	0 80	1 20	0 0	0 0	15 79	3 16	1 5
亜高木層	1987年 (%)	1 13	2 25	5 63	5 42	5 42	2 17	9 60	3 20	3 20	22 79	2 7	5 14	37 58	12 19	15 23
	1988年 (%)	1 13	1 13	6 75	4 33	4 33	4 40	6 40	6 20	3 41	12 38	11 21	6 0	23 36	22 34	19 30
低木層	1987年 (%)	3 50	2 33	1 17	5 56	2 22	2 22	5 63	3 38	0 0	13 87	2 13	0 0	26 68	9 24	3 8
	1988年 (%)	3 50	2 33	1 17	3 33	4 44	2 22	3 38	5 63	0 0	8 53	7 47	0 0	17 45	18 47	3 9
合 計	1987年 (%)	7 41	4 24	6 35	16 57	8 29	4 14	18 66	6 22	3 11	40 82	4 8	5 10	81 67	22 18	18 15
	1988年 (%)	6 35	4 24	7 41	12 43	9 32	7 25	13 48	11 41	3 11	24 49	19 39	6 12	54 45	43 36	24 20

## 2. 縦断調査区の毎木調査結果

縦断調査区は、防風樹林帯の先端部から内部にかけてどのような変化があるかを見るために、防風樹林帯内の山道にそって基点から40mまでを2mの幅で毎木調査と植生断面図を作成した。その調査結果を表-3と図-5に示す。

表-3によると75個体出現し、1987年には正常個体であった52個体のうち18個体に変化がみられた。そのなかには、個体上部が枯れたものが15個体、個体全体が枯れたものが3個体あった。

表-3 縦断調査区における1987年と1988年の毎木調査結果 (単位 cm)

個体番号	種名	胸高直径	樹高	最上生枝高	最上等級	'88枝生化	30m	136 イジュ	15.5	880	525	525
								137 ツゲモチ	582	455	455	
								138 イタジイ	12.4	885	正	正
								139 コバンモチ	8.0	360	正	96折
								140 ヒメユズリハ	7.8	670	正	正
								141 アオバナハイノキ	17.5	963	正	正
								142 イタジイ	11.8	955	正	正
								143 アデク	0.5	157	正	正
								144 コバンモチ	5.5	585	正	5
								145 イヌマキ	5.0	625	正	正
								146 枯	6.5	630	枯	枯
								147 タイミンタチバナ	0.5	134	正	枯
								148 枯	3.0	412	枯	枯
								149 ツゲモチ	9.5	815	正	正
								150 ヒサカキ	2.5	435	正	正
								151 枯	7.9	390	枯	枯
								152 ムッチャガラ	9.0	845	正	正
								153 タイミンタチバナ	1.0	168	正	正
								154 モッコク	2.0	375	正	正
								155 モクレイン	1.0	215	正	正
								156 イタジイ	12.5	800	正	正
								"	11.0	625	正	正
								"	4.0	445	正	正
								157 イジュ	25.0	1070	正	枯
								158 イジュ	11.0	645	正	枯
								159 コバンモチ	1.0	235	正	枯
								160 イタジイ	12.0	970	正	枯
								"	11.0	440	正	枯
								"	10.0	775	正	枯
								161 アデク	2.5	330	正	枯
								162 枯	6.5	625	正	枯
								163 モッコク	3.0	365	正	299
								164 タブノキ	1.5	289	正	223
								165 オキナワシャリンバイ	10.0	870	正	正
								166 モッコク	9.0	640	正	正
								167 イタジイ	5.5	705	正	5
								168 モッコク	3.5	525	正	489
								169 イタジイ	14.0	850	正	正
								170 リュウキュウウチク		230	正	正
								171 ツゲモチ	1.5	370	正	32
								172 タイミンタチバナ	2.0	497	正	枯

表中の正は正常個体、枯は枯死個体、枯倒は枯死倒木

表-3 から出現個体の変化について、調査区ごと及び階層ごとにまとめたものが表-4である。これから出現個体 75 個体について 1987 年と 1988 年を比較すると、正常個体が 52 個体に対して 40 個体、上部枯死個体が 14 個体に対して 24 個体、全体枯死個体が 10 個体に対して 12 個体で、正常個体が減り上部枯死や全体枯死の個体が増えている。

高木層、亜高木層、低木層の階層別に 1987 年と 1988 年を比較しても、正常個体が減少し、上部枯死や全体枯死個体が増加し、特に亜高木層の減少率が大きい。

距離別にみてみると、防風樹林帯の先端に近いほど正常個体が減少し、上部枯死個体や全体枯死個体の割合が増加していることがわかる。

断面模式図においては、高木層に出現する個体は枯死等の変化が少なく概観的にはそれほど変化はみられないけれども、亜高木層に出現する個体の上部枯死や枯死個体が多く、樹林帯全体がスカスカになって見える。

表-4 各縦断調査区における 1987 年と 1988 年の毎木調査結果

距 離		0~10m			10~20m			20~30m			30~40m			合 計		
階 層	個 体 数	正 常 個 体 数	上 部 枯 死 数	全 体 枯 死 数												
		1987年 (%)	7 100	0 0	0 100	2 0	0 0	0 80	4 20	1 0	0 78	7 0	0 22	20 87	1 4	2 9
高 木 層	1988年 (%)	6 86	1 14	0 0	0 100	2 0	0 0	0 80	4 20	1 0	0 78	7 0	2 22	19 83	2 9	2 9
		1987年 (%)	6 60	3 30	1 10	5 100	0 0	0 0	6 60	3 30	1 10	5 36	3 21	6 43	22 56	9 23
亜 高 木 層	1988年 (%)	2 20	6 60	2 20	1 20	3 60	1 20	1 40	4 50	5 10	1 36	5 21	3 43	12 31	17 44	10 26
		1987年 (%)	1 33	2 66	0 0	1 100	0 0	0 100	2 0	0 0	0 75	6 25	2 0	0 0	10 71	4 29
低 木 層	1988年 (%)	1 33	2 66	0 0	1 100	0 0	0 50	1 50	1 0	0 75	6 25	2 0	0 0	9 64	5 36	0 0
		1987年 (%)	14 70	5 25	1 5	8 100	0 0	0 0	12 71	4 24	1 6	18 58	5 16	8 26	52 68	14 18
合 計	1988年 (%)	9 45	9 45	2 10	4 50	3 38	1 13	1 53	9 41	7 9	1 58	18 16	5 26	8 53	24 32	12 16

## 摘要

- (1) 辺野喜川上流分水界付近において、周辺の自然林伐採後3年経過した防風樹林帯の森林構造について、日越・千木良（1988年）の調査から約1年後の変化をみると、同調査地で同様の方法で毎木調査を実施し比較した。
- (2) 基点から0m、5m、20m、80mの各横断調査区と0m～40mの縦断調査区を設け毎木調査をして比較した結果、1987年の調査に対して1988年は全体的に正常個体が減少し、上部枯死個体と全体枯死個体が増加していた。
- (3) 高木層、亜高木層、低木層の階層別に、1987年と1988年を比較すると横断調査区および縦断調査区とも、亜高木層の減少率が高かった。
- (4) 樹林帯の先端（基点）に近いほど、1988年のほうが横断調査区および縦断調査区とも正常個体の減少率が大きく、上部枯死や全体枯死個体の増加率が大きかった。
- (5) 本地域より時間の経過した他地域の防風樹林帯は、特に高木層や亜高木層の上部枯死個体・樹幹の白化・枯死個体・倒木が目立ち、陽地性の植物の種の被度や群度の増加がみられ、かつて帯状の林であったものが、疎らな帯状の林から点状の木の列へと変化している。本地域も今後、同様な経過をたどるものと思われる。

## 参考文献

- 日越国昭・千木良芳範、1987. 辺野喜川上流伐採残存林の現況－残存林の構造について－  
沖縄生物教育研究会昭和62年度研修会講演要旨 沖縄生物教育研究会
- ・——、1988. 辺野喜川上流における防風樹林帯の構造について  
沖生教研会誌 第21号 沖縄生物教育研究会
- ・他、1987. 沖縄島国頭地域の現存植生図 国頭郡天然記念物緊急調査 II  
沖縄県教育委員会
- 新納義馬、1971. 沖縄島の植生概観 沖縄生物学会誌 第8巻 第10号 沖縄生物学会
- 、1984. 沖縄の植物の植物社会学的概観 沖縄の生物 沖縄生物教育研究会
- 新城和治・宮城康一、1987. 沖縄島国頭地域の植物相 国頭郡天然記念物緊急調査 III  
沖縄県教育委員会
- 宮城康一・他、1987. 与那覇岳天然保護区域の植生 国頭郡天然記念物緊急調査 III  
沖縄県教育委員会



0m 調査区の高木層の様子



5m 調査区の高木層の様子



20m 調査区の高木層の様子



80m 調査区の高木層の様子

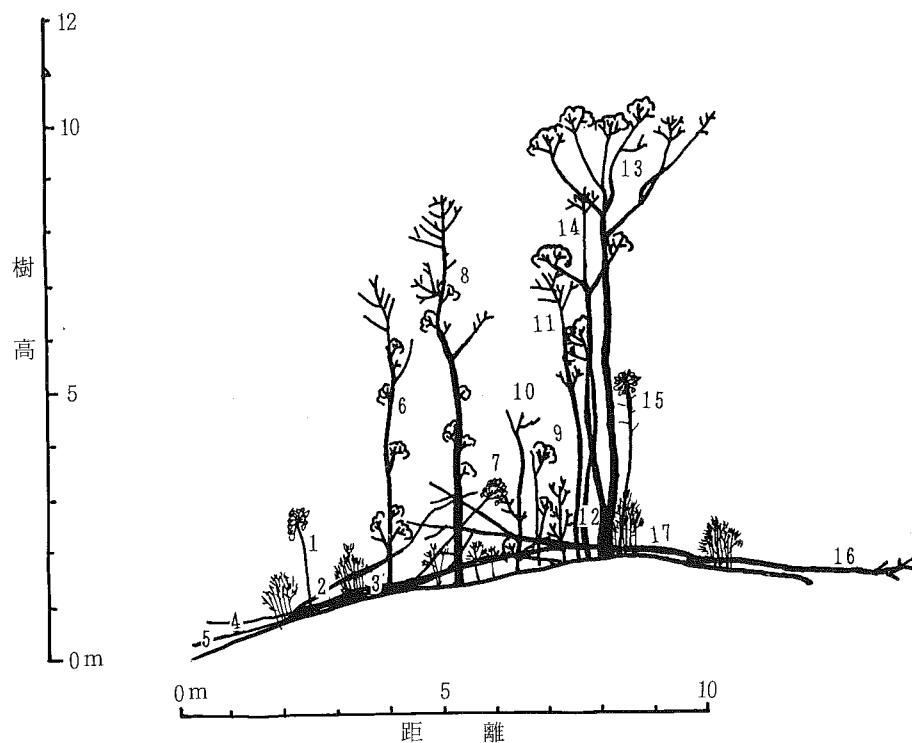


図-1 0m 調査区植生断面模式図

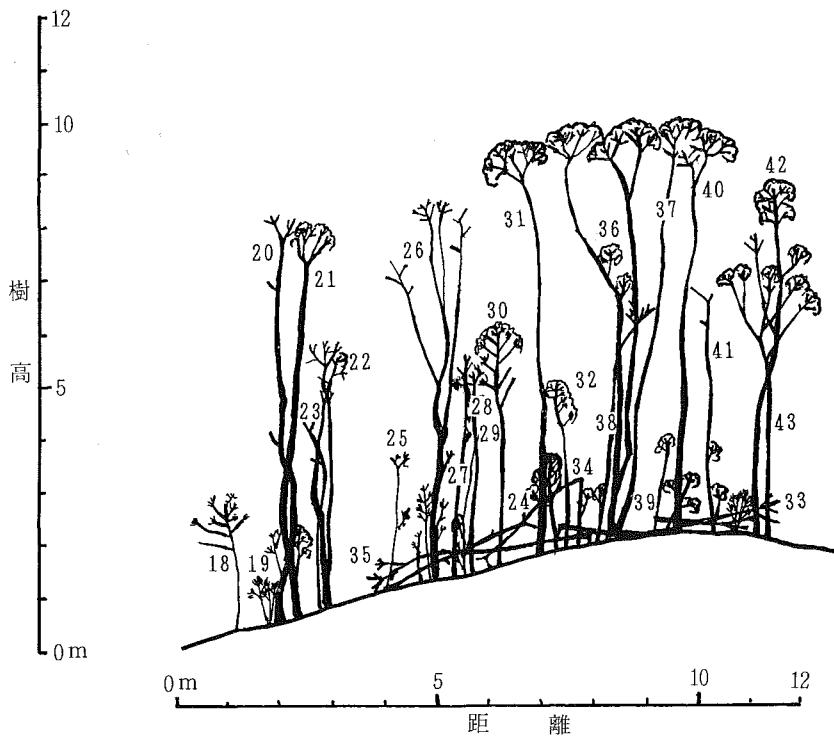


図-2 5m 調査区植生断面模式図

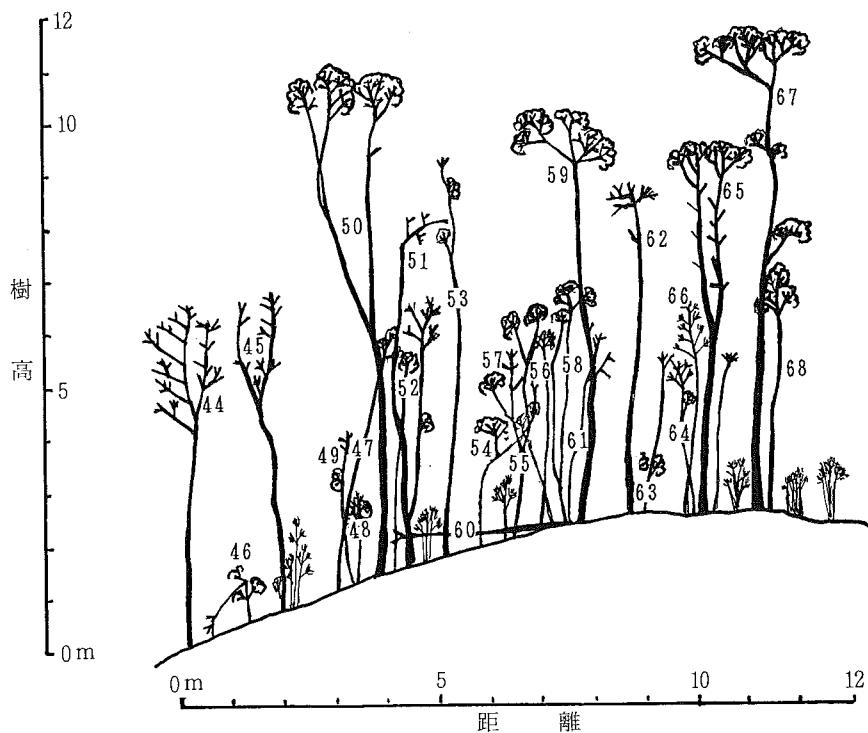


図-3 20m 調査区植生断面模式図

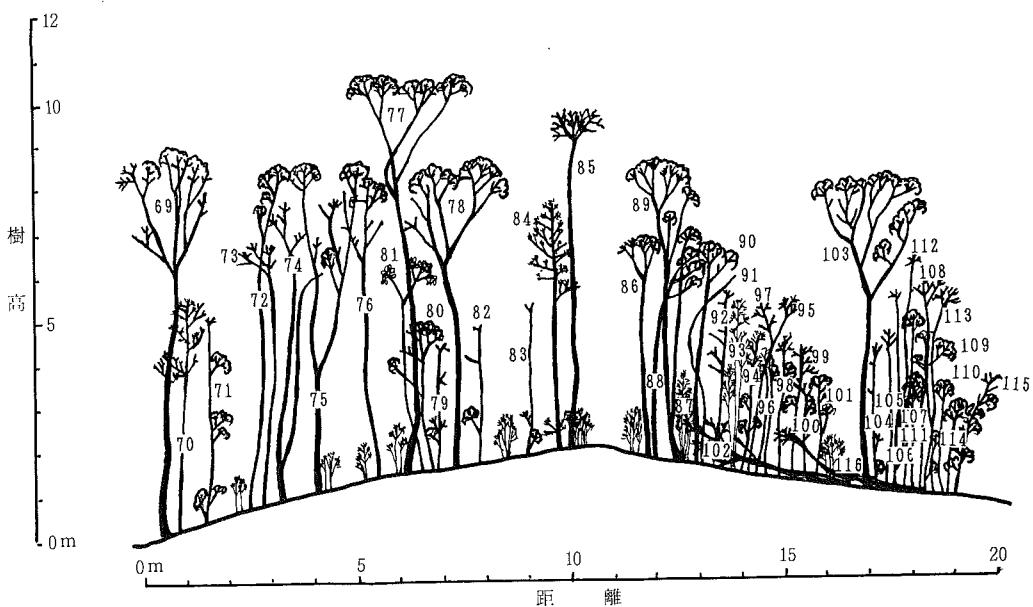


図-4 80m 調査区植生断面模式図

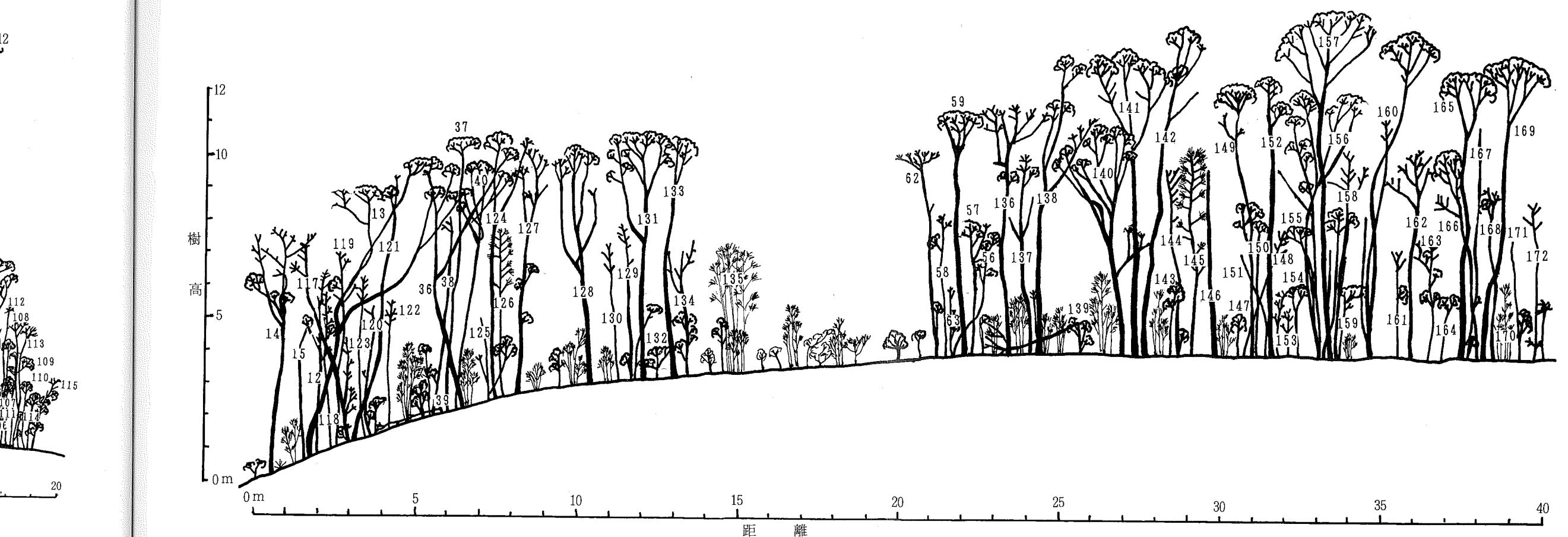


図-5 縦断調査区植生断面模式図

## 琉球ガラス工芸の文化

高 良 松 一

(沖縄県立博物館)

An Essay on Ryukyu Glasswork

Syoutiti TAKARA

(Okinawa Prefectural Museum)

### 1 はじめに

琉球ガラスは、いまどこの工場でも大変な活気があり、かつてなかった隆盛期を迎えている感じがする。あるガラス製造業社のなかには、50人近い従業員をかかえている大規模工場もあり、終戦直後のあの零細企業としてのイメージからは、とても想像できない素晴らしい進展ぶりである。現在、県内にはガラス製造業社がおよそ8社ある。北部2、中部3、南部3である。個人経営の小規模工場を含めるとまだあるかも知れない。

「琉球ガラス」がこのように好調な伸びを示しているのは、復帰後、急速に増大している観光ブームが背景にあり、その「手づくりの琉球ガラス」は、お土産品としてよく売れているのである。

それでは沖縄特産品としての「琉球ガラス」が、なぜこんなに人気があり、よく売れているのだろうか。それについては、いろいろ考えられるけれども、その最も大きな理由は「手づくりガラス」にあると思う。

「琉球ガラス」は、色が美しくあざやかであることがひとつ特徴になっている。したがって、どち



琉球ガラス村展示室

らかというと、装飾性としてのイメージが強く、美術工芸品的な趣が感じられる。

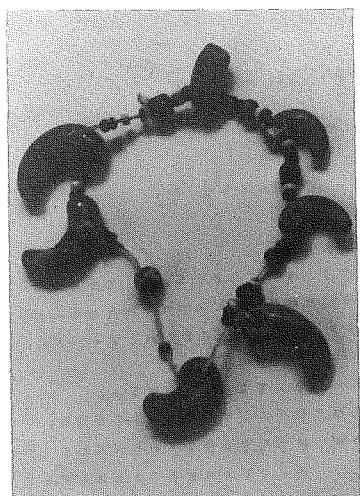
ところで、「琉球ガラス」がこのように盛況にあるのは、過去のいろんな厳しい教訓が支えになっているのではないだろうか。100年の歴史をもつといわれる、この「琉球ガラス」の歴史について工芸史的考察を試みようとするのが、この論考の目的である。

そこで、まず「ガラス工芸」について、どういう文献資料があるかを調べてみるとした。ところが驚いたことに、工芸史のなかに「ガラス」という項目がないのである。これはどの歴史書にも出てこないし、美術工芸に関する文献にもない。沖縄でガラス製造が始まってから100年の歴史があるというのに、何の記録もないというのは、意外に思うとともに気になる問題である。

ただ、最近になってガラスについて調査研究をやり出した人が何人かいる。宮里一夫氏がその一人である。彼は琉球新報に「陶工・平田典通とガラス」を書き、特に中国から伝わったガラスのことについて書いている。

## 2 ガラスの歴史

沖縄にガラスはいつ伝わったか



古代ガラスまが玉

沖縄に「ガラス」がいつ頃入ってきたかについては、「歴代法案」、あるいは「球陽」、「琉球国旧記」等からある程度わかっている。即ち、「球陽」には、  
「宿藍田（与那城筑登之典通）曾ツテ貢使隋ヒ入り京ニ赴ク。而シテ甕器ヲ焼製シ及ビ焼ク料（俗ニ焼玉ト呼ブ）ノ法ヲ伝受シテ帰来シ、以テ五色ノ珠玉ヲ焼キ以テ国用ニ備フ」

また、「琉球国旧記」の中の、(技術)の部には、医道、画師、染布工、鞍工、錫工等で、1730年代の職種の名称が33出てくるが、その中には瓦工、陶工と並んで焼玉の項目がある。

瓦工の欄には「中国人がやって来て国場村に住み、真玉橋の東に陶舎を造って瓦器を焼いた」とあり、陶工には、「尚豊玉が 洲から高麗人三名、一官、十六、三官を連れて來たが、そのうち二人は帰り、一人は残って甕器（高麗焼）を教えた」とある。

さらにまた、典通は1690年、円覚寺の開山和尚像を作った。この像について、比嘉景常氏は「琉球焼物考」の中で次のようにふれている。「さて、彼の遺作中での一大傑作ともいるべき円覚寺開山和尚の像は、この年出來たものである。某氏の取り計らいで拝観の栄を得たが、實に優秀なものである。土像の上に彩色を施してある。義眼は典通得意の焼玉であろう」

さらにこの件に関して宮里一夫氏は「比嘉氏は画家で、かつ工芸への造詣も深かったひとである。彼が<義眼>という字をわざわざ使って強調しているのは、和尚像の眼玉が通常の陶玉ではなく、それ以外のガラス玉もしくはそれに近い何かであったためと考えられる」と、「陶工・平田典通とガラス玉」のなかで書いている。「焼玉」という表現からも分かるように、ガラスが沖縄に入ってきたのは、おおよそ1600年代のことだということが推測できる。

[注]「典通」とは、画家で工芸家の平田典通のこと。「焼玉」とはガラスのことである。

#### 沖縄でのガラス製造はいつ始まったか

沖縄でガラス製造が開始されたのは、正確な資料はないけれども、明治の中期ごろだろうといわれている。長崎や大阪からやって来たガラス職人らの技術によって、那霸西町に始めて工場が立った。経営者は前田正男という人で、創設者はこの人の父親で本土出身であった。従業員も5～6人程度の小さな工場である。前田正男は若い頃から、その工場でガラス見習工として働いている。

当時のガラス製品は、「ランプのほや」・「角形・丸形の駄菓子瓶」・「蠅取り器」・「漬物入れ」・「投薬瓶」・「石油壺」等であった。その製品は、北部や離島にまで出荷され、需要はかなり大きかったようである。そこで問題になるのが、「ガラスの材料」である。破損したガラスが材料であったが、その屑ガラスも思うようにはなく、工場経営にとっては、何よりも、このガラス材料集めが難問だったようだ。

しかし、このようにして造られた戦前のガラス製品は、第二次世界大戦で消失してしまって、ほとんど残っていないが、「角駄菓子瓶」の一部が、現在、奥原硝子製造所に保管されている。

また那霸西町にあったガラス工場も戦争によって破壊され、ガラス製造も中断されていたが、1947年頃、現在の奥原硝子製造所（那霸市与儀1-26-7）に再開されることになった。

そのガラス製造所もしばらくすると倒産。またもやガラス製造は中断の憂き目に晒される。しかし工場は何としても再開したいという関係者達の強い要望と期待によって、その

後を引き取って再開に当たったのが、奥原盛栄である。それは三年後の1950年のことであった。そして、工場名も「奥原硝子製造所」と改められた。その名称は戦後沖縄のガラス製造の草分けをした人ということで、経営者は変わっても、今日まで大事に残されている。

戦後まもない頃の製品は、戦前のものとだいたい同じようなものであったが、進駐軍が工場を訪れるようになり、写真や現物を持ってきて注文をするようになった。その注文品は、「水差し」・「コップ類」・「パンチボールセット」・「デキャンター」などである。

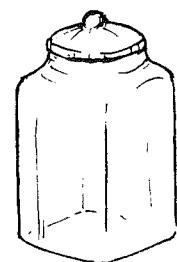
しかし、もっとも人気のあったのは、注文品ではなく、奥原さんが＜遊び＞でつくった鯉のかたちの花瓶であった。それが進駐軍に好まれ、当時、飛ぶように売れたようだ。

いま、ガラス製品の一つに朝顔を組み合わせた花の造形がある。これも職人が遊びで作ったもので、これがこんなに売れる商品になるとは、誰も予想できなかつたそうである。

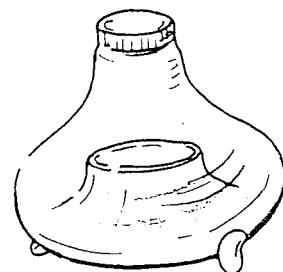
1972年、奥原盛栄の死去により、工場を引き継いだのが、現在の経営者、桃原正男氏である。桃原正男氏が奥原硝子製造所に見習工として働き始めたのは、1957年のこと。



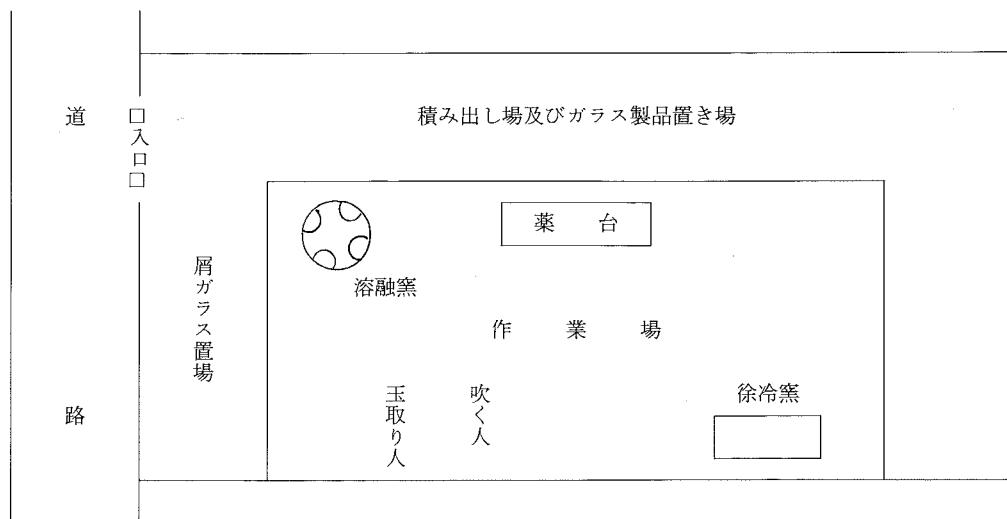
薬ビン



駄菓子瓶



蠅取り器



明治44年創立のガラス工場

それから30年余、ガラス一筋に生き、業界のリーダーとして働いてきた人である。

奥原硝子製造所は、そういう意味で、沖縄ガラス製造業の草分けの働きをしてきた最も歴史のある「ガラス製造所」である。

沖縄でガラス製造業が開始されてから、100年の歴史があり、創設されたところは那覇西町。しかも全島でたった一つしかなかったガラス製造所が、現在、各地に建つようになり、その進歩のあとが伺われる。

### 琉球ガラス略年表

明治 ————— この頃、ガラス製品はほとんど本土より移入していた

42年頃 奥武山公園に玉井（江）商店創業する〔寄留商人の経営〕

44年頃 前田ガラス工場創業

○年頃 三重城ガラス工場（？）創業

昭和 ————— 三重城ガラス工場、昭和初めまで操業（知念さんの証言）

19年 10：10 空襲で前田ガラス工場焼失する

20年 終戦

24年頃 沖縄ガラス（新田社長）創業

26または27年頃 奥原ガラス創業（沖縄ガラスから移行？）

49年頃 県内のガラス工場は49年度の調査で6社

沖縄ガラス工場、牧港ガラス工場、奥原ガラス工場、  
ナニワガラス工芸社、琉球ガラス製作所、国際ガラス工芸社

58年 琉球ガラス工芸協同組合設立

（資）奥原硝子製作所、琉球硝子製作所、国際硝子工芸社、

（資）親富祖民芸ガラス、（有）沖縄寿ガラス工芸社、

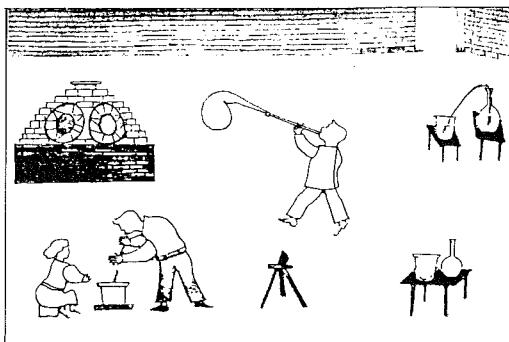
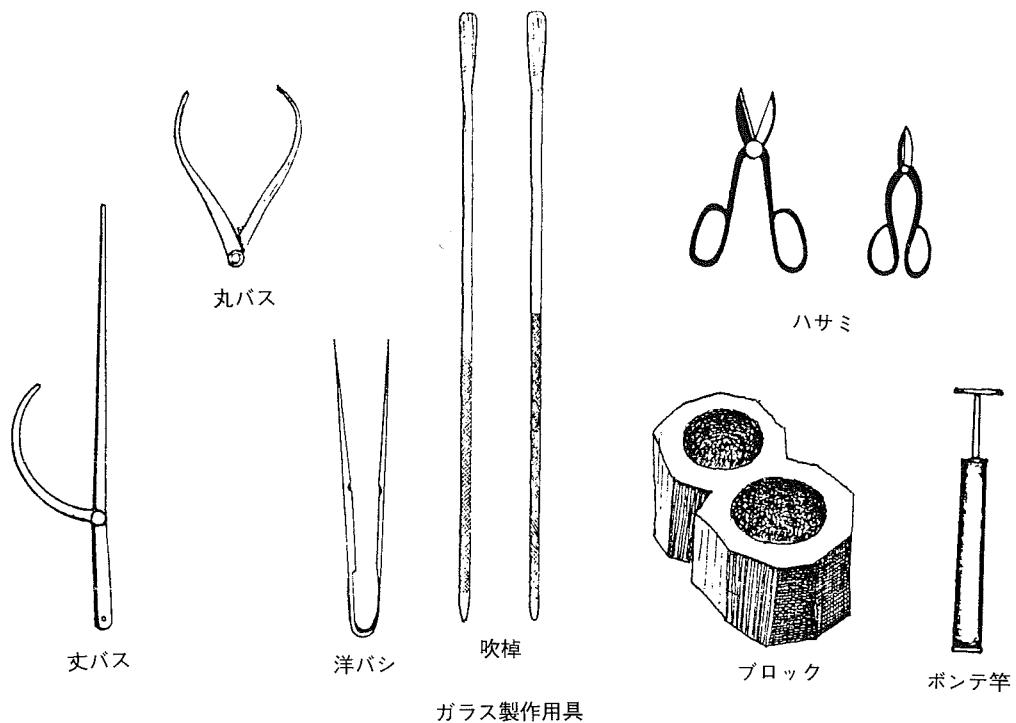
以上6社で設立

60年2月 琉球ガラス工芸協業組合へ組織変更

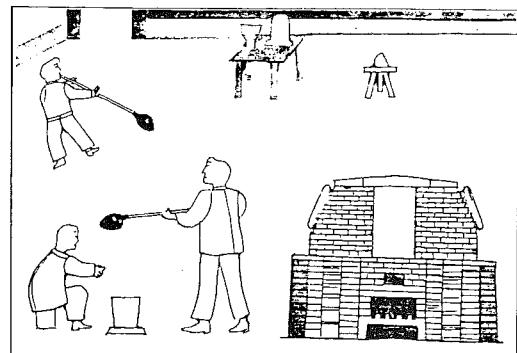
4月 琉球ガラス村オープン

協業組合としての共同工場及び共同施設が完成し、生産活動及び  
販売活動を開始する

ガラス製作工具



レトルトを吹く人（ガラス、窯と火と風より）

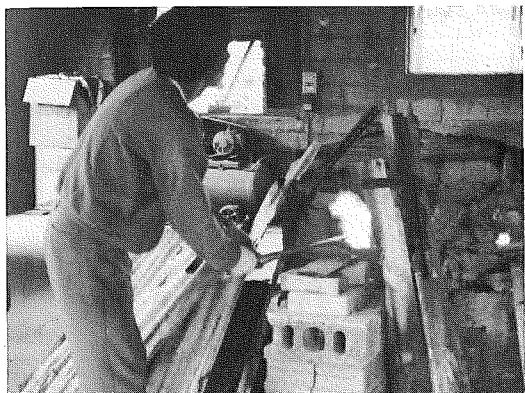


吹き場の状況（ガラス、窯と火と風より）

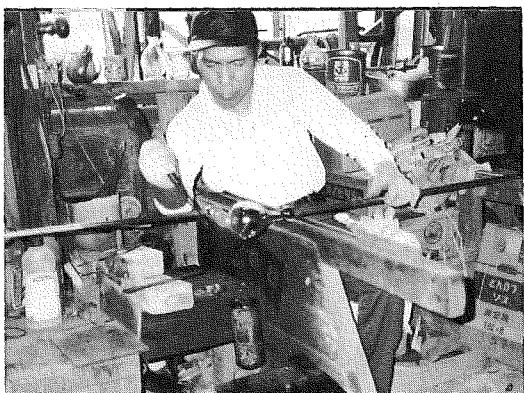
## 琉球ガラスの製造法

琉球ガラスの基本的な成形は、吹きガラス工法で、宙吹き法、型吹き法の二種類が主体である。宙吹き法は鉄管の先にガラスを巻き取り、型を用いずにそのまま口で吹きながら成形する方法で、型吹き法は文字通り型を利用して成形する方法である。

先ず、ガラスをルツボの中で溶融させ、溶けたガラスを鉄管の先に取り出して管を回転させながら吹く方法は、伝統的技法にもとづくもので、戦前からこの方法は特に変わっていない。この吹きガラス工法で肝心なことは、グループの息の合った連携プレー、そして細工の手際よさである。



製作する稻嶺盛吉氏



製作する桃原正男氏

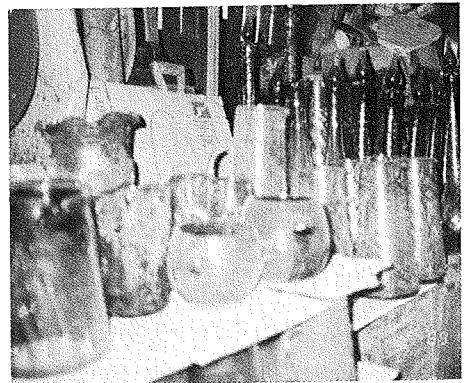
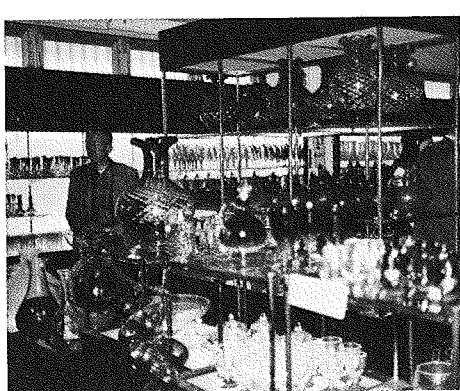
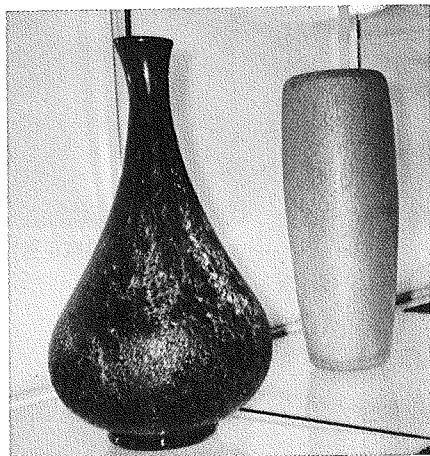
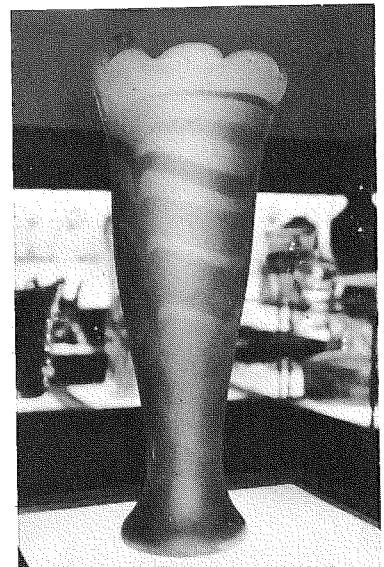
## 琉球ガラスの素材及び色彩

琉球ガラスは、廃品としのガラス瓶や屑ガラスを材料として使ってきましたが、これは戦前も戦後もそれほど変わっていない。戦前は「白い瓶」「一升瓶」「しょう油瓶」などの屑ガラスが利用され、戦後は進駐軍によって持ち込まれた「コーラー瓶」が主に利用された。

現在製造されている琉球ガラスは、色あざやかな美しい色彩が売りものになっているけれども、戦前は透明ガラスが主体で、色のついたガラスは使われていなかった。戦後でも始めの頃はまだ透明ガラスが主体であって、色出しをするようになったのは、色ガラスの廃品が出回るようになってからである。

最近、沖縄でもガラス素材開発の導入によって、地元の珪砂からガラス素材が作られて

各製造所で造られている琉球ガラス製品



いる。しかし、その素材開発にはまだまだ金が掛かるようで、コストが合わないこともあって、これを利用しているガラス工場は、ほとんどいないというのが現状のようである。

## ガラスの素材

一般にガラスという言葉は、ソーダガラスをさしている。それに対してクリスタル・ガラスというのがある。ガラスはその成分によって性質が違ってくる。それを表にしたのが図3である。この表以外にもガラスはたくさんあるけれども、細かいのは省略して、大きく4つの種類について示すことにした。これらのガラスの成分については、古代ガラス以来3000年以上もかけて人間の知恵がつくりあげたものである。ゲイルマンはエジプトの第18王朝のガラスを分析して、主成分を次のように示している。珪砂・アルカリ・石灰・アルミナ等で、ガラス分類表に照合すれば、2に相当するものである。主成分は似ているが、古代ガラスの場合は、珪砂と石灰に対してアルカリが多い。従って水に弱いガラスで腐食されることが多い。

## 素材主成分の役目

### (1) 硅砂

ガラス独特のもので、性質が硬く水や化学薬品に強く、電気絶縁性も大きく、65%～75%位使用される。

### (2) 石灰

珪砂とソーダだけで出来たガラスを水ガラスといっている。これは水にとけてしまうガラスで、それに石灰を加えると、素地が水にとけないガラスとなる。6%～14%位使用される。

### (3) アルミナ

少量加えることによって、酸に作用されることを防ぎ化学的抵抗力を増す。この成分は一般に珪砂に少々含まれているので、特にこれを入れるということは、稀である。

表3 ガラス成分表

No.	名 称	主成分	特 質	用 途
1	ソーダ石灰ガラス	珪 砂 ソーダ 石 灰	微青色 紫外線をよく吸収する 水に溶ける	板ガラス 雑瓶
2	ソーダ石灰 アルミナガラス	珪 砂 ソーダ 石 灰 アルミナ	1より強度を増し、耐水性を増す	酒類瓶 ビール瓶等
3	カリ石灰ガラス (ボヘミヤガラス)	珪 砂 カ リ 石 灰	耐水性強く 堅牢 薬品に強い、	化学器具 高級食器
4	船アルカリガラス (クリスタルガラス)	珪 砂 カ リ 船	加工し易く 比重大きく光沢 美しく、叩けば 金属属性の音がする	カットグラス に適す 最高級食器 光学機器 装飾用品

## ガラスに色をつける方法

ガラスに色をつけるには、いくつかの方法がある。先ず全体に色をつける方法としては、原料を調合する段階で、色をだす金属酸化物を混入し熔かして発色させる方法である。この場合は、ガラス全体に色がつき、ガラスの厚さが増すにつれて、色は濃度をましてゆく。

それから、ガラスの表面にだけ着色する方法としては、三つの方法がある。①ガラスがまだ灼熱の段階に、金属酸化物などを噴霧状にして吹きつけると、いろいろな色あいの玉虫色に着色できる。これをスター彩色という。②酸化リチウムという原料を加えて熔かしたガラスを、硫酸銀や酸化銅の加熱液の中に浸しておくと、ガラスのなかのリチウムが外に出て、そのかわりに銀や銅が入り込んで、ガラスの表面が黄色（銅）に発色する。これをイオン交換着色という。③色ガラスの微粉を、松ヤニの入った油で練って、ガラスの表面に塗布し、摂氏600度程度で焼きつけると、ガラスの表面と色ガラス粉が溶け合って、表面に色をつけることができる。

表4 ガラス色分類

色	着色剤	
紫色	酸化マンガン 酸化マンガンと少量のコバルト 酸化ニッケルと少量のコバルト	MnO <sub>2</sub> MnO <sub>2</sub> , Co <sub>2</sub> O <sub>3</sub> NiO, Co <sub>2</sub> O <sub>3</sub>
青色	酸化コバルト 酸化銅	Co <sub>2</sub> O <sub>3</sub> CuO
緑色	酸化第一銅 酸化銅 酸化クローム 酸化ウラニウム	Cu <sub>2</sub> O <sub>3</sub> CuO Cr <sub>2</sub> O <sub>3</sub> UO
黄色	酸化第二鉄 酸化セリウム 酸化ウラニウム 硫黄 銀 炭素	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub> CeO <sub>2</sub> UO <sub>2</sub> S Ag C
赤色	酸化第一銅 金 セレン	Cu <sub>2</sub> O Au Se
乳白	酸化錫 燐化合成 螢石、水晶石	SnO <sub>2</sub> P <sub>2</sub> O <sub>5</sub> 等 CaF <sub>2</sub> , 3NaF・AlF <sub>3</sub>

ガラスの色と着色剤

沖縄のガラスの着色は、材料の屑瓶の色がそのまま使われている。約7種類以上の色が混ぜ合わされている。

薄茶色………ビール瓶と透明瓶を混合

透明色………ジュース瓶

淡青色………コーラ瓶

緑色………セブンアップ瓶

黒色………サントリーオールド瓶

茶色………ビール瓶

くすんだ紫色………透明瓶と二酸化マンガン

郡青色………コバルト

空色………酸化銅

赤色………酸化鉛系無機質顔料

## 古代ガラスの色と現代ガラスの色

現代のガラスは、無色透明であることが一つの特徴と考えられているが、ガラスには透明なガラスと不透明なガラスがある。昔のガラスは、大まかに分けると、西暦紀元を境にして、それより古い紀元前の時代のガラス器類は、不透明ガラスによってつくられ、紀元後のガラス器類は、主として透明ガラスでつくられているといつてもよい。

透明なガラスを尊重するようになったのは、紀元前一世紀に吹きガラスの技法が発明されて、ガラス器が大量生産されるようになってからである。いいかえれば、ガラスが宝物であった段階では、不透明色ガラスが好まれ、庶民のものとなった段階では、透明性が好まれるようになった。

しかし、現代ではむしろ結晶ガラスのような不透明なガラスが、再び脚光をあびるようになってきており、透明性志向から歴史のサイクルは、ふたたび不透明ガラスの方向に逆転している傾向にある。

## ガラスの性質

①透明な素材である。②水や酸やガスに侵されにくい。③表面がなめらかである。④ショックに弱く壊れやすい。⑤彩色が自由自在である。⑥切断と削り、そして、溶け合わせが可能。⑦何度も熔かしたり硬めたりできる。⑧電気を通さない。

## 琉球ガラスの特徴

琉球ガラスの特徴は、ひとつに材料として屑ガラスを使うため、ほかのガラス器に見られるようなガラス特有の透明感からくる＜冷たい感じ＞や＜繊細さ＞ではなく、むしろくすんだ色や気泡などによる＜手作りで素朴＞な味わいがある。

また、成形における吹きガラスの工程は、冷えきらないうちに仕上げるという、究めて時間に制約された面があり、職人の意図や技術を越えたく偶然の美しさ>が出てくるのも琉球ガラスの大きな特徴である。

そしてこのように製品一つ一つの色や形が、微妙に違うところが、＜手作りの琉球ガラス＞としての素朴さや親近感につながっているのである。

さらにもうひとつ特徴的なことをあげると、現在のガラス製品は、非常に色彩が美しくなっていることである。

### 3 ガラス工芸の歴史

珪砂を溶かしてガラスを造るという技術は、紀元前2500年にさかのぼる。ローマ時代の博物学者プリニウスは、その著書「博物誌」のなかに、次のようなことを書いている。

「ペルース河畔にキャンプしたフェニキア人の商人たちが、ナトロン（ミイラに用いる天然炭酸ソーダ）の塊の上に鍋を載せて食事の準備をしていた。すると驚いたことに火の作用によって、彼らの商品であるナトロンが川岸の砂と化合して、ナトロンの上に透明な硬いものが被さってしまった」。おそらくこの記述は、ガラス産業が盛んであった地中海の人々によって語り継がれていた伝説的見方が大きい。

しかし、ガラスが、いつ、どこで、人工的に造りだされたかは、まだ明らかにはされていない。多くの伝説に語られているように、自然の加熱によって、偶然に、珪砂がソーダや木炭などと融合して溶解したことに、端を発したことは容易に想像できる。

ところが、いつごろ、どこで始まったかについては、まだ明確な資料はない。ただ、最古の人工ガラスは、エジプトでもメソポタミアでも、ほぼ紀元前2300年以前に遡るもののが出土している。エジプトの古王時代（紀元前2650～2134）の遺跡から出土したと伝えられるガラスのネックレス。あるいはメソポタミアのテル・アスマルのアッカド期（紀元前2340～2150）の遺跡から出土したガラス棒がその例である。

ところで、ガラスの容器が造られるようになりはっきりと分かっている。メソポタミアでは紀元前16世紀、エジプトではそれよりやや遅い紀元前15世紀であった。

特に、メソポタミアでは、多種多様な技法が早くから使い分けられていて、ガラス工芸が高度に発達した科学知識をふまえて、見事な展開をしていたことが、出土した遺物によって知られている。

西洋ガラスがパミール高原、中央アジアの天山山脈を越え東洋へもたらされたのは、それから大分経ってからである。東洋と西洋の架け橋となったシルクロードは、東西の文明を結んだ交易路として壮大な交流をもたらしたが、西洋のガラスを東洋に伝えるルートにもなった。やがてガラスは中国、朝鮮を経て日本にまで伝えられるようになった。したがって、日本のガラスの遺物には、中国系、朝鮮との関連があるもの、西洋系のもの、さらに日本で造られたものがあり、かなり複雑に入り込んでいる。

日本におけるガラス製品がはじめて現れたのは、福岡県筑紫郡須玖岡本遺跡や糸島郡三雲南小路遺跡からの出土品のガラス壁であり、何れも弥生時代と言われている。

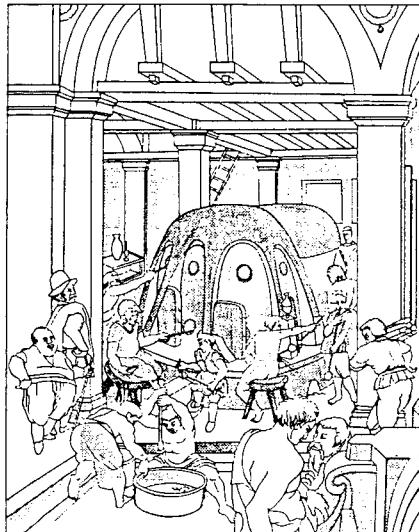
1543年種子島にポルトガル船が漂着して日本にはじめて鉄砲が伝えられたが、それから6年遅れてイスパニアの宣教師フランシスコ・ザビエルが宣教のため上陸した。この時、

山口の大名内義隆にガラスで出来た鏡や望遠鏡などが贈られている。

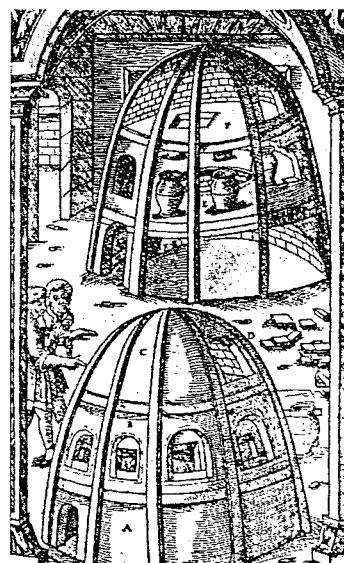
この頃から南蛮船の渡来は頻繁となり、ガラスが、絹、時計、香料、砂糖とともにに入ってきた。

長崎には開港前後に南蛮の技法とともに工場もつくられ、それと前後して、中国系のガラスの技術が溶け合って、長崎ガラスが生まれた。ポルトガル、イスパニア南蛮地方は、当時ソーダ石灰を中心としたガラスを造っており、鉛ガラスは造られていないことからも推察できる。

日本の近世におけるガラスの発達は、弥生、古墳時代大陸から伝わった古代ガラスと関係ないようで、九州の長崎を起点として、1500年代に起こり、日本で調合され、製造されてきたものと考えられる。



16世紀のガラス工場  
(ガラス、窯と火と風より)



16世紀イタリアの窯  
(ガラス、窯と火と風より)

## 4 ま と め

今回の「琉球ガラス」の調査で明らかにしてみたかったのは、沖縄にいつガラスが入ってきたか、そしていつ頃からガラス製造が始められたのか、さらにどういうガラス製品が造られたのか、ということを調べるのが目的であった。

そのために、各ガラス製造所、歴史文献資料、さらに新聞に掲載されているガラスに関する論文あるいは記事等を参考にしながら調査を行うことにした。しかし、ガラスに関する文献資料が乏しく、確たる歴史資料としてのガラスに関する記録が、現在見つかっていないのが現状である。したがって、この調査にあたって、先ず歴史的背景になる検証のところで、最も苦労したのが実感であった。でも、沖縄にガラス製造所が設立された草分けの時代に、その製造所で働いていた人達がおられて、その方々から聞き取り調査ができるのは、せめてもの幸いであった。

実際には、もっと時間をかけてきめ細かい調査研究が必要なんですが、今回それが出来なかつたのは大変残念でした。この「琉球ガラス工芸の文化」が少しでもガラス工芸史に役立つことができたら幸いに思う次第である。

なお、この調査にご協力頂いた、宮里一夫氏、桃原正男氏、平良邦夫氏、琉球ガラス村、琉球共栄ガラス工房、瑠璃ガラス工房様に感謝を申し上げます。

### <参考文献>

- 宮里一夫著 『陶工・平田典通とガラス』 1980
- 由水常雄著 『ガラス入門』 平凡社 1983
- 由水常雄著 『ガラス工芸』 ブレーン出版 1975
- 由水常雄著 『ガラスの話』 新潮社 1983
- 佐藤潤四郎著 『ガラス—窯と火と風—』 芸艸堂 1979
- ジャン・シャルル・ガドー著 『ガラス工芸』 美術出版社 1975
- 佐藤潤四郎著 『ガラスの旅』 芸艸堂 1976
- 平良邦夫著 「ガラス」『沖縄の伝統工芸』 沖縄県工芸振興センター 1979
- 渡名喜 明著 「桃原正男さんとガラス工芸」『Coralway』 南西航空 1988

## 沖縄芸能と太鼓(序)

大城學

(沖縄県立博物館)

Introduction to the Drums of the Okinawa Performing Arts

Manabu OSHIRO

(Okinawa Prefectural Museum)

### はじめに

沖縄芸能(広く本土の芸能も含めて)の打楽器のうちで、もっともよく使用され、かつ重要なものが「太鼓」である。古文献には「つづみ(鼓)」とあるが、それらはどういう形状をしていたのか、どのようにして鳴らしたのか(桴を使用したのか、あるいは掌<「指を含む」>で打ち鳴らしたのか)充分わかっていない。古代日本では、形状や材質は問わず打楽器の総称を「鼓」といっていたようである。

「鼓」や「太鼓」は、リズムを刻むのに用いられる打楽器としてだけでなく、古文献や芸能をみると、呪的な要素がある。それらをとおして、「鼓」や「太鼓」の実態をみてみたい。

### [一]

はじめに、古文献にあらわれた「鼓」「太鼓」の用例をみてみよう。

#### (1)『李朝実録』(1392~1546)

##### ア)世祖8(1463)年の記事

一、迎詔勅、中原の詔勅及び我が国の書契国に到り、船泊して初面のとき、旗纛・蓋等の物を以て儀仗と為し、又軍士甲冑を具して、出で迎へ、詔勅・書契を舉轎に安じ、傍より鼓錚を擊ち、太平簫を吹きて、王宮に迎へ入る。

「中国からの詔勅や朝鮮からの文書が琉球に着き、それをかごに乗せ、その傍から鼓やドラを打ち鳴らして、太平簫を吹いて王宮に迎え入れられる」ということである。港から王宮までの行列で、かごの側から鼓を打っていたというが、どういう形状であったのか、どのような打ち方をしていたのかはわからない。旗をたて、かごをかついでいる行列は、古くは例えば、冊封使行列の絵図を現在見ることができるが、上述の記録は、あるいは写真(1)のような様子であったのかも知れない。



写真(1) 「冊封使行列図」(沖縄県立博物館所蔵)

#### イ) 成宗 10 (1479) 年の記録

一、七月十五日は、諸寺刹幢蓋を造る。……居民、男子の少壮官を選び、或は黄金の仮面を著し、笛を吹き鼓を打ちて王宮に詣る。……鼓打も亦我が国と同じ。

7月15日に宮廷で行事があったようである。「諸寺では旗を立てる柱やはた、かさをつくる。元気のいい若者を選び、黄金の仮面を被り、笛を吹き、太鼓を打って宮廷に詣る。鼓の形状は朝鮮のそれと同じである」ということである。琉球王城で使っていた鼓は、朝鮮の鼓と同じ形状のものだというが、具体的にどういうものなのかはわからない。また、打ち方もわからない。ただ、このころは琉球王城でも鼓を使用していたことだけは明らかである。

#### (2) 『中山伝信録』(1721年)

##### ウ) 中秋宴の記録

王府の庭中、北宮滴水の前に、木台方五六丈なるを造り……次に樂工十四人有り。  
……三絃二、提琴一、……笛一、小鑼一、鼓二、場に登り、……。

「王城の庭の北殿滴水の前に、木材で四方5、6丈の舞台をつくり、そこで芸能が披露される。樂工14人がいて、三絃2人、提琴1人、笛1人、小鑼1人、鼓2人が舞台に登って云々」といっている。ここでも鼓の形状や打ち方については書いていない。

## エ) 重陽宴の記録

竜潭は、王宮の北、円覚寺の西に在り。……重陽宴に、竜舟の戯を為す。……竜舟は三、式は福州に見る所と略ぼ同じ。……毎舟中央に鼓を設け、……船首の一人は鑼を擊ち、鼓と相応す。

重陽宴では、竜潭で舟遊びがあったようである。舟は3艘で、それぞれの舟の中央に鼓を設け、船首の1人がドラを打つとそれに応じて鼓を打っていたという。舟の長さは3丈（約9m）で、槳（乗組み人員）は二十八人とも書いてあるから、かなり大きな舟であったと思われる。現在の舟漕ぎの様子から察すると、鼓は桴で打っていたのであろう。

### （3）『琉球聘使略記』（1833年）

#### オ) 「於 宮中奏楽次第」

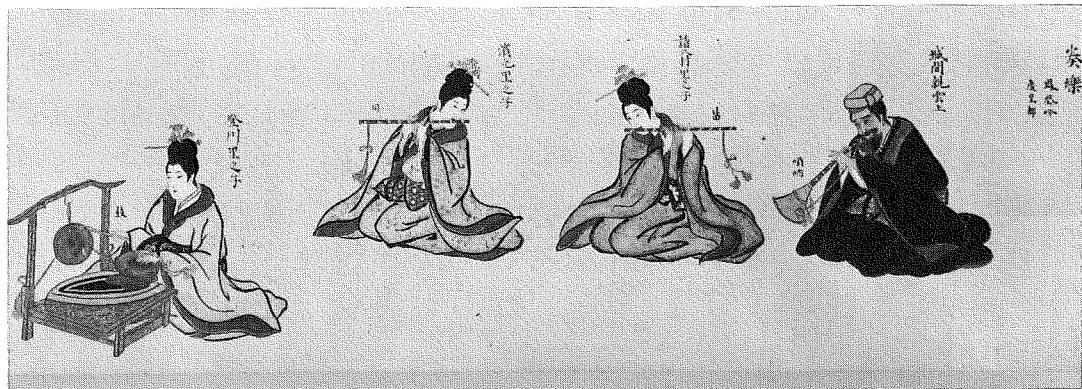
前		
第一奏樂	萬年春	プログラム前半の第一奏楽で「萬年春」という曲を、噴呴以下の楽器で演奏したといふものである。鼓にはくクウ>とルビが振られている。第二奏楽「賀聖明」、第三奏楽「樂清朝」、後半の第一奏楽「鳳凰吟」、第二奏楽「慶皇都」にもそれぞれ上記と同様の楽器および演奏者名が記されている。
噴呴	城間筑登之親雲上	
笛	譜久村里之子	
笛	濱元里之子	
鼓 小銅鑼 緩子	登川里之子	
銅鑼 檀板 緩子	宇地原里之子	
韻鑼	富永里之子	奏楽ほか唱曲というのがあって、それは三絃や琵琶、搖琴、胡弓などを使っていて、歌詞はすべて漢文である。明清樂を演奏していたと思われる。一曲だけ「琉歌」というのがあって三絃2挺を使い、歌詞は「キヨノホコラシヤ、ナヲニギヤナタテロ、ツボテオルハナノ、ツユキヤタゴトニ」と記されている。
挿板	小祿里之子	

明清樂を演奏していたとすれば、鼓は桴を使って打っており、写真（2）のような演奏風景であったとか思われる。

### （4）徳川黎明会・徳川美術館所蔵の鼓

徳川美術館所蔵の楽器は、1798（寛政10）年に江戸の戸山の別邸で薩摩藩の士を楽士の中心として演奏が行われた際の楽器で、琉球使節より尾張徳川家に献ぜられたものであるという。それらの楽器のなかに鼓があり、次のように解説されている。<sup>(註1)</sup>

鼓——ともに（徳川美術館と水戸彰考館に所蔵されている鼓のこと一大城）全く同じ朱塗沈金七宝繫牡丹唐草模様の台が付属する。鼓の彩色もまた同じである。皮の周囲は金箔を貼り、中心部は黒漆塗りとし、両者共に透き漆を上からかけてある。ともに金箔白檀塗りの桴一対が添ってある。



写真(2) 「琉球人座楽並躍之図」(沖縄県立博物館所蔵)

鼓は両側に皮が張られている。

また、徳川美術館には「琉球楽器図巻」(享保3、1718年以前の成立か)があり、道楽(路次樂のことか)の楽器には鼓<クウ>が2対あって桴も描かれている。さらに、坐樂(御座樂のことか)にも鼓<クウ>があって、木のわくに設置されている。坐樂の演奏風景も描かれているが、桴を用いて打っている様子が伺える。

(註1)、(註2) 徳川義宣「琉球王府式樂とその樂器について」『沖縄の工芸』所収、昭和50年。

#### (5) 『校注琉球戯曲集』(1929年)

同書に1838(尚育4)年の仲秋宴、重陽宴の御冠船踊の記録がおさめられている。仲秋宴に「入子」の芸能があって、鼓、大鼓と関わりがある。後述するが、現在でも民俗芸能に<道イリク>というのがあって、やはり太鼓の演技である。

力)「入子躍」に鞨鼓打と太鼓打が登場している。鞨鼓(羯鼓)は、鼓の一種で、台の上にすえて桴を両手を持って打ち鳴らす。

キ)「道入子」には太鼓の大桴、小桴の打ち方、太鼓打人数のはやし声のタイミングなどを図示してある。さらに入子躍之時歌として(世なをりぶし)で2歌詞うたい、扇子をどりとある。

ク)「中イリコ」「長イリコ」「三ツ入子」があって、但道入子同断とある。

ケ)「道入子」がさらに2回演じられる。

以上は、二番のプログラムであるが、三番の扇子をどり(曲名は、こてぶし)に次のように記されている。

コ) 音取笛太鼓小鼓箏笙三味線小弓琴各一曲調部候間、拍子木打候得ば笛之席太鼓小鼓にて出、一並に立。

音取りの笛、太鼓、小鼓、箏、笙、三味線、小弓、琴がひとつおり樂器の調子を検べ、調絃をする。そして、拍子木を打って、笛と太鼓に合わせて踊り手が登場するというも

のである。着付、歌詞をみると、現在演じている古典舞踊若衆踊の若衆こてい節と思われる。出羽を笛と太鼓の演奏にのせて登場するというのも現在の演じ方と同じである。

サ)「唐棒」に拍子木打候得者、太鼓どら拍子にて出る。

唐棒の演技の出羽は、太鼓とドラを打つ、ということである。

#### (6)『躍狂言并組躍番組』

石垣市字石垣の「躍番組」である。宮鳥御嶽において催された結願祭芸能のプログラムで、1895（明治28）年の記録。

シ) 鼓打躍

一 女四人	西大やまふさ	同やまいつ	女4人で鼓打躍を躍ったというだけの記録と、衣裳のことを若干記してある。白地衣を着ていたとすれば、女踊りであったかも知れない。
	仲大浜やめいた	同やまんだら	
	但白地禪衣	赤首調	

以上みてきた文献の＜鼓＞＜太鼓＞は、打楽器としての記録であった。次に、歌謡にうたわれた＜鼓＞＜太鼓＞を検討してみたい。

## [二]

歌謡に＜鼓＞や＜太鼓＞のことがうたわれているもののうち、はじめに『おもろさうし』から検討してみよう。

#### (7)『おもろさうし』(1531~1623)

『おもろさうし』には、鼓のことはくつゝみゝあるいはくつゞみゝとあり、その語にたとえばくつゝみのあぢゝという具合に、鼓を称えた表現がある。鼓をよんだオモロは、重複をのぞいて10数首ある。

ス) 卷2-11 あおりやへかふし

一 中くすく	あつる	中城にある
うらとよむ	つゝみ	浦々まで鳴響む鼓
うちちへ	なりあからせ	(鼓を) 打って鳴り揚がらせよ
又	とよむくにあつる	鳴響む国にある

島々浦々にまで響きわたる名高い鼓、それを打ち鳴らすことによって、土地の靈力を高め、繁栄を願うというものである。呪的な予祝の発想が伺える。

セ) 卷19-15 うらおそいのおやのろかふし

一 さしき	よりやげの	もりに	佐敷寄り上げの杜（原注一干瀬崎）に
しまよせる	つゞみの	あるあぢ	島の人々を寄せる力をもっている鼓を

所有している按司

又 ね国 よりやげの もりに

根国寄り上げの杜に

「しまよせる」は鼓の美称である。佐敷の寄り上げの杜に、島の人々を寄せる（世の中を治める）力をもっている鼓を所有している按司がいるというのである。

これらと類似した表現に「うらのなりとよみ」(卷13-225) ——島々浦々みまで鳴り響く鼓、「しまなめるし」(卷16-42) ——島を鎮める呪力をもった鼓、「くにとよみ」(卷19-44) ——國中に鳴り轟く鼓、という意味である。いずれも、鼓の靈力により國（領地）の生命力を高めて繁栄をもたらし、領地を治めるという趣旨である。

ソ) 卷12-18 あふりやへかふし

一	あめくにやか おもろ	天久仁屋（オモロ歌人）のおもろ
	けらへ あや つゝみ	立派な美しい鼓
	うちちへ なりあからせ	（鼓を）打って鳴り揚がらせよ
又	あめくしか せるむ	天久子（オモロ歌人）のおもろ
	神遊びにすばらしい鼓を打ち鳴らし、繁栄を予祝するというものである。	

タ) 卷2-41 うらおそいふし

一	こゑく 世のぬしの	越來世の主の
	つゝみの あぢなりかなし	鼓の按司鳴り加那志（を打って）
	ふうくに うちよせれ	果報な國を打ち寄せよ
又	あかる世のぬしの	揚がる世の主の

「あぢなりかなし（按司鳴り加那志）」は、鼓の美称である。靈力ゆたかな鼓によって果報な國が打ち寄せられるという内容である。

チ) 卷12-26 たいらのとのゝふし

一	きこゑきみ とよみ	名高い聞ゑ君鳴響み<神女名>
	せだかきみ とよみ	靈力豊かな精高君鳴響み<神女名>
	うちちへ みものきみ	（鼓を）打って 看見物<神女名>
又	きたたんの みやに	北谷の神祭りの庭に
	あがなさの みやに	吾が成さ（領主）の神祭りの庭に
又	たまよせか まへに	靈寄せ（建物名）の前に
	よりたちか まへに	寄り立ち（建物名）の前に
又	もゝくちの つゝみ	たくさんのが
	八そくちの なりよぶ	たくさんのが

なりよぶ（鳴り呼ぶ）は鼓の美称（卷2-71、卷15-53）。「なりきよら（鳴り美ら）」（卷1-37、卷10-3、卷13-82）、「なりとよみ（鳴り響み）」（卷1-37）、「なよす」（卷

#### 7-47) も鼓の美称。

北谷の神祭りの庭に、領主の神祭りの庭に、靈寄せ・寄り立ち（穀物の倉のことか）の前に、たくさんの鼓を打って村の繁栄を予祝するのは実にみごとである、という内容である。百口・八十口（たくさん、数多く）の鼓を打ち鳴らすところにより一層、鼓の靈力を鼓舞するものと考えられる。

以上、オモロの例をいくつかみてきたが、オモロでは、鼓は靈力を有するもの、それを打ち鳴らすことで人びとや領地の生命力をたかめ、繁栄をもたらすもの、予祝するものとして詠まれている。鼓はきわめて呪的な楽器として位置づけられているのである。

#### (8) 『かでいかりぬ うやぬに一り』

多良間島で旧暦5月に行われる祭り＜スツウプナカ＞でうたわれる神歌である。

嘉手苅の親が立派な家を建てた。新築祝いをしようとしたが、鼓の木がなくて鼓が造れない、伊良部島の友達をたよって鼓の木を求めに行く。友達は植えてある木をまるごと差しあげた。その木を切り倒して船に乗せて多良間島に持ち帰った。鼓の型を造って牛の皮を被せて、縄を掛けて締め、打つと島中に鳴り轟いた。その鼓に合わせて坐ってニーリ。を歌い、立ってニーリ。をうたうと神の上に届いた。その美しさよ、清らかさよ、という内容である。（註3）後半部分の歌詞を引用してみたい。

61、かでいかりぬ ちいじいん	嘉手苅の頂に
シュラ マシャリ。 ウヤヨ	（囃子、以下省略）
62、ういうきぬ むりん	ウイウキの森に
63、ゆぬぶやば ぎゅらい	大きな家を造って
64、みゆぶやば ぎゅらい	立派な家を造って
65、ふきいぎゅらい からや	葺き建ててからは
66、ちいふぎゅらい からや	造り建ててからは
67、ゆぬぶやぬ ゆわいぬ	大きな家の新築祝いのための
68、みぬぶやぬ しゅぎいぬ	立派な家の祝儀のための
69、ちいぢいむ。ぎぬ ちまり	鼓の木が足りなくて
70、なるきぎぬ ちまり	鳴る木が足りなくて
71、ちいぢいむ。ぎぬ ちいめん	鼓の木の故に
72、なるきぎぬ ちいめん	鳴る木の故に
73、いらうたびい しいたり。	伊良部島へ旅をしてきました
74、ぱなりたびい しいたり。	離れ島へ旅をしてきました
75、あんやちか うやよ	そうであるならば親よ
76、うりやちか しゅやよ	そうであるならば主よ

- 77、いびなぎな うしゃぎ  
 78、むとうなぎな じゃうやしゅ  
 79、あまり ふからしゃん  
 80、どうきいぬ いしやうしゃん  
 81、きびがしいた むめい  
 82、きびや きりたうし  
 83、ゆだや うちあやし  
 84、いちいきいしゅり。 きいしゅり  
 85、ななきいしゅり。 きいしゅり  
 86、だきやばま むちゅるし  
 87、かむ。がぴいだ むちゅるし  
 88、ふにがまん ぬゆし  
 89、ぴやしゃきいん ちいまぎ  
 90、たらまじいま むめい  
 91、みいぱらじいま むめい  
 92、む。がやばま むちゅるし  
 93、かむ。がぴいだ むちゅるし  
 94、うまからぬ むちやぎ  
 95、かでいかりん むちやぎ  
 96、ういうきん むちやぎ  
 97、ちいぢいむ。かた ちいふり  
 98、なるきかた ちいふり  
 99、うしいぬが うしいかぶし  
 100、うやがばに かぶし  
 101、なや かきていしみてい  
 102、うていば しいまうしゅい  
 103、うていば ふむ。うしゅい  
 104、なうていがし なやきでい  
 105、いけていがし なやきでい  
 106、しいまうしゃき なやきでい  
 107、ふむ。うしゃき なやきでい  
 108、びゆてい にり。にらぎ  
 109、たちいてい にり。にらぎ
- 植えてあるまるごと差しあげましょう  
 根っこからすべて差しあげましょう  
 あまりに嬉しくて  
 とても嬉しくて  
 その木の下にいらっしゃって  
 木を切り倒して  
 枝をうち払って  
 五切りに切って  
 七切りに切って  
 ダキヤ浜に持ち降ろして  
 神の浜に持ち降ろして  
 船に乗せて  
 早先に積みあげて  
 多良間島にいらっしゃって  
 三原島にいらっしゃって  
 ンガヤ浜に持ち降ろして  
 神の浜に持ち降ろして  
 そこからの持ちあげは  
 嘉手苅に持ちあげて  
 ウイウキに持ちあげて  
 鼓の型を造り  
 鳴る木の型を造り  
 牛の皮をかぶせて  
 覆い物を被せて  
 縄を掛けて締めて  
 打つと島中に轟き  
 打つと国中に轟き  
 どういうふうに名が轟いたか  
 いかなるふうに名が轟いたか  
 島中に響くように名が轟いた  
 国中に響くように名が轟いた  
 坐ってニリ。をねりあげた  
 立ってニリ。をねりあげた

110、いちいくいどう かむ <small>ガ</small> うえ	五声こそ神の上
111、ななくいどう しじいがうえ	七声こそ靈魂の上
112、かむ <small>ガ</small> うえぬ かぎしゃ	神の上の美しさよ
113、しじいがうえぬ かぎしゃ	靈魂の上の清らかさよ

新室を寿ぎ、富貴や家の繁盛をもたらすために、靈力ゆたかな鼓を造って打ち鳴らすといふ。ここでも鼓が靈力をもつ呪具としてうたいあげられているのである。また、木を切り倒して、適当な大きさに切り、鼓の型を造って牛の皮を被せ、縄を掛けて締めるという具合に、鼓の製作過程を具体的に歌っている。その点はオモロの鼓のうたわれ方とちがっている。

(註3)『沖縄の神歌』沖縄の神歌伝承活動(I)－宮古諸島－、沖縄県教育委員会・1988年。歌詞の引用も同書による(表記を若干変えた)。

#### (8)『かんたゆどうんた』

与那国島の古謡である。〈かんたゆ〉は〈神の世〉、〈どうんた〉は〈ゆんた〉の意。まず、歌詞を紹介してみる。

1、んかちどうち	昔年の
かんたゆぬ まにどうす	神の世の真似をする
2、うやぎどうち	富貴な年に
かんたどうち なりょーりば	神の世になっているので
3、しどうむていら	早朝に
あさばんでいに うきて	未明に起きて
4、ばがさしぐん	我が刀を
ばがていぬぶん とうりやむてい	我が手斧を取り持ち
5、ばがちでいん	我が鼓も
くりないむぬん みぬたば	この鳴り物もなかったから
6、まいぬだまに	前の山に
うりとうむり はいりてい	それを探しに入り
7、ちまさぐり	横に探り
なぎさぐり みりばどう	縦に探ってみると
8、なちむしき	夏6月
んにすみ ねぬたば	気に入るものがなかったから
9、どうぬふさみ	同じ跡を踏み
ふみやかいし やむどうり	踏み返し家に戻り
10、どうぐていすば	門の側に

	とうndeいゆむたる はぬていき	とび出て生えた桑の木
11、まむていかんだ	ぐしくかんだ はゆたば	マムテ蔓が
12、ぐしくかんだ	まむていかんだ とうりやはんし	石垣蔓が生えているので
13、いつかいし	ななきり きりうとうし	石垣蔓を
14、さいぐひとうば	しぐひとうば たるみょーり	マムティ蔓をとりはずし
15、うちぬかば	んまぬかば ゆしきょーり	五かえしに
16、ばがないむぬ	くりないむぬ ぱりていどう	七切りに切りおとし
17、ひとつむとうにや	あんとうりまでいん ちかりょーり	細工人を
18、ふたむとうにや	いりむていにん ちかりょーり	大工を頼み
19、みむとううていば ていんまでい	ちかりょーたる はがちでいん	牛の皮を
20、ばがないかにん	くりないかにん ゆぬすぶさ	馬の皮を寄せて来て
		我が鳴り物を
		この鳴り物を張ってから
		ひと打ちには
		網取<地名>まで聞こえ
		ふた打ちには
		西表<地名>まで聞こえ
		み打ちには天まで
		聞こえた我が鼓
		我が鳴る鐘も
		この鳴る鐘も同じ勝負である

この古謡もくかでいかり<sup>ぬ</sup> うやぬにーり<sup>。</sup>>同様、鼓の製作過程を歌い、さらに鼓の靈力についてうたっている。製作過程は、細工人や大工を頼んだりするあたりは、くかでいかり<sup>ぬ</sup> うやぬにーり<sup>。</sup>>よりも具体的になっている。

一打ちで網取まで、二打ちで西表まで、三打ちで天まで鳴り響くというのは、単に音響的によく鳴るということではない。鼓の靈力によってそれらの土地の生命力を高め、繁栄を願うという意を含んでいる。

<オモロ><かでいかり<sup>ぬ</sup> うやぬにーり<sup>。</sup>><かんたゆどぅんた>にうたわれた鼓は、単なる打楽器ではなく、靈力を持つきわめて神聖な呪具としての機能をもっていることが、構造的にわかった。

### [ 三 ]

太鼓の芸能について、現在演じられているもののなかからいくつかを紹介してみたい。

### (9) 舞踊地謡・合奏

古典芸能の場合、地謡の楽器は三線、琴、胡弓、笛、太鼓を用いることが多い。そのときの大太鼓は大太鼓（宮太鼓。長胴太鼓）と小太鼓（締太鼓。和太鼓）を使用する。大太鼓は、基本的には強声部に打って楽曲にリズムと速度を与え、小太鼓は弱声部に打って大太鼓を助け、リズムに修飾を与える。合奏の場合も上記の楽器を使用するが、地謡、合奏いずれのときも幕開けに、太鼓のみで＜音取り（ニートウイ）＞を演じることがある。

古典女踊の地謡では太鼓を用いらないが、老人踊、若衆踊、二歳踊、雑踊には太鼓を用いる。あくまでもリズムを刻むのに用いられるので、テンポのおそい音曲には太鼓は登場しない。

演劇（組踊、芝居、狂言）では、効果をあげるために太鼓を使用する機会が多い。芝居では、演技開始の前に、＜呼び太鼓＞といって、観客動員のための太鼓打ちがある。

### (10) エイサー

エイサーは盆踊である。沖縄本島中・南部地方では、大太鼓と締太鼓を打ち、踊り手がつく。30～50人の青年たちによって演じられる。大太鼓が先頭になり、締太鼓がそれに続き、さらに踊り手が続くが、大太鼓よりも締太鼓の方が人数が多い。いずれも桴を用いて打つ。勝連半島で演じられるエイサーには、パーランクーといって片面張りの太鼓を使い、桴は大太鼓や締太鼓で用いられるものよりも細い。

### (11) ウステーク

沖縄本島及び周辺離島で演じられている婦女子による輪踊りである。旧暦7月の盆前後に行われる行事＜シヌグ＞で踊られる。方言でチヂンと称する太鼓（平太鼓）を先頭の数人の婦人が打ち、以下、踊り手が20～50人程続く。桴の先に布を巻いて用いる場合が多い。チヂン打ちは音頭取りもある。

### (12) 道イリク

嘉手納町字野里で継承されている芸能である。ショーグ（鉢）打ち2人が先頭になり、後に太鼓（締太鼓）打ち9人が三列縦隊で並んで、打ち鳴らしながら歩く。現在、舞台芸能として定着しているが、本来、道ジュネー（お練り）の芸能である。野里の旧暦8月の村踊りでは、芸能公演の幕開けと最後にこの道イリクを演じている。

### (13) 屋良のチンク

嘉手納町字屋良に伝承されている芸能である。チンクは鉢のこと。道ジュネーの芸能である。チンク2人と太鼓（締太鼓）40～50人で行列をつくり、勇壮に演じる。

### (14) 京太郎

沖縄市字泡瀬と宜野座村字宜野座で演じられている門付芸系統の芸能である。三線（早口説）と太鼓のリズムに合わせて馬舞者や踊り手が登場し、隊列をつくって演技をする。

扇子の舞（京の下り）、御知行（升斗舞）、鳥刺舞などを踊った後、馬舞者の口上になるが、出羽以外の演技はすべて太鼓でリードしていく。

#### (15) 打花鼓

中城村字伊集に伝承されている芸能。中国の影響を受けた芸能で、打楽器を打ち鳴らし、三線に合わせて踊る。服装も中国風である。11人で演じるが、楽器を担当するのは、ドラ1人、ガク2人、ハーチンガニ1人、太鼓1人、ブイ1人。三線の打花鼓の歌が始まると下手から登場する。舞台を一巡して後、ブイ打ち、ハーチンガニ打ち、太鼓打ちがそれぞれの楽器を打ち鳴らしながら踊る。踊るのはこの3人だけである。

#### (16) 大胴小胴

石垣市登野城に伝承されている芸能。太鼓（大胴）と小鼓（小胴）、締太鼓を組み合わせた能楽系の芸能で、早舞の曲が演奏される。琉球王朝時代、石垣市四箇村（登野城、大川、石垣、新川）の士族は謡曲や能楽の囃子をたしなんでいた。そのときに習得して、現在に伝えられている。

#### (17) タイラク

八重山郡黒島に継承されている芸能。笛のリードでパーランクーを持った青年男子10数人で演じる。ショロ毛でつくった髪にかんざしをさし、つくり髪を付けて着物の右肩ぬぎ、腰に煙草入れをさす。二列に並び、左手に鼓を持ち、右手に持つ桴で打ち「ハイヤーサッサ」と声をかけながら踊る。

#### (18) タイコマー

八重山郡鳩間島で伝承されている芸能。旧暦6月に行われる豊年祭に演じられる。数人二列縦隊になった青年男子が笛のリードによって、「ヒヤーユイ」という掛け声をかけながら演技をする。二列の間に長刀を持った者が1人いて、太鼓を打っている間、長刀の芸を演じる。東村と西村でそれぞれが演技の型がある。平太鼓を使う。

#### (19) 太鼓踊

先のタイコマーも含めて、八重山全域で太鼓踊りが伝承されている。石垣市登野城では、旧暦6月の豊年祭で少年男子（若衆）によって演じられるが、鉦2人と締太鼓10数人を使用する。竹富島の太鼓踊りは、旧暦10月の種子取祭で庭の芸能のひとつとして演じられている。鉦2人、締太鼓10数人。現在、中学生から老人までの男子で構成されている。石垣市平得の太鼓踊はイリク太鼓といわれ、旧暦6月の豊年祭と種子取祭（新暦1月15日）に演じられる。同市大浜の豊年祭（旧暦6月）でもイクリ太鼓が演じられる。登野城や竹富島同様に、鉦と太鼓で構成され、人数もほぼ同じ。中学生男子が演じる。石垣市川平の太鼓踊は、結願祭（旧暦8月）に青年男子2人1組で数組出演し、笛のリードで踊る。

## (20) シヌン

八重山郡与那国島で太鼓及び太鼓の芸能を「シヌン」といっている。シヌンは与那国島で製作される。牛の皮を両側に張ったものである。与那国島で、シティ（節祭）やシティガソ（結願祭）のときの舞台芸能で、最初に演じられる。シヌン数人、ドラ1人、笛1人が舞台奥に並び、笛のリードで掛け声をかけながら勇壮にシヌンを打つ。シヌンは左わきにかかえ、右手に桴を持って打つ。シヌンを打つことによって舞台を祓い清めるのだとう。棒踊のときも同じメンバーで囃す。また、庭で旗頭を立てる際にも同じメンバーで囃しているが、それは「ガッサイ」と称する。

以上、いくつか太鼓の芸能をみてきたが、他にも太鼓を芸能に用いているのがある。古く、琉球王府の公式儀礼に演奏された「御座樂」や道行芸の「路次樂」にも太鼓が用いられていた。ハーリー（船漕ぎ）や綱引きのガーエー（囃し。気勢をあげる意）にも太鼓がにぎやかに打ち鳴らされる。祭りでは、先に紹介したウスデーク以外にも神歌を歌う際に鼓を打つことがある（例一国頭村比地のウンジャミ、那覇市識名の三月遊び、竹富島の種子取祭、鳩間島の豊年祭）。棒踊や獅子舞の囃しにも太鼓が打たれる。上野村字野原で催される祓いの行事「サティパロウ」で、パートトゥが集落内を練り歩く際にホラ貝などといっしょに太鼓が使われる。

このように、「鼓」「太鼓」は祭りや行事にはもっともよく使用されており、欠くことのできない重要な楽器であることがわかる。

## [ 四 ]

本土の文芸における「鼓」「太鼓」の用例をいくつかみてみよう。

## (21) 歌謡

「古事記」中巻に皇太子（応神天皇）のため母親の息長帶日売命が待酒（祭祀用神酒）をつくられたとき、建内宿彌が讃美して皇太子のために答えてよんだ歌。

この神酒を 醸みけむ人は その鼓 曰に立てて

歌ひつつ 醸みけれかも 舞ひつつ醸みけれかも

この御酒の 御酒の あやに 轉樂し ささ

鼓を曰の側に立てて、その鼓の音に合わせて歌い踊るのである。歌い舞るその勢いによって御酒の醸成をうながすというのである。

「万葉集」にも「鼓」をよんだ歌がある。

卷2-198 高市皇子尊の死をいたんで柿本朝臣人麻呂が作った歌（皇子尊が少年の頃、

壬申の乱の時の活躍をよんだくだり）。

「かけまくも ゆゆしきかも…… 齊ふ鼓の音は 雷の声を聞くまで……」

(<兵士を>お励ましになり、<隊伍を>整える鼓の音は雷の音かと聞こえるほどで、……)

卷11-2641 「時宋の打ち鳴す 鼓数み見れば 時にはなりぬ 会はなくも怪し」

(時宋<時を知らせる役人>が打ち鳴らす鼓の数を数えてみると、会うべき時刻になつた。それなのに会わないのでおかしいことだ。)

万葉集の例では、戦闘を鼓舞するために鼓を打ち鳴らしたり、時を知らせるために鼓を打ち鳴らすというものである。

## (22) 太鼓の芸能

本土の芸能で太鼓が用いられるのは、雅楽や能楽をはじめ、民俗芸能では太鼓踊、雨乞い、田遊などでみることができる。

ア) 雅樂 —— 雅樂は宮廷音楽として輸入され、奈良時代までは雅樂寮に属する専門の音楽家によって演奏されたが、平安時代になると職業音楽家のほかに、公卿などのなかにも雅樂の奏者がたくさんあらわれ、寺社でも演奏されるようになり、雅樂は国の儀式のための音楽から、個人の教養や趣味の音楽に変わっていった。

雅樂は普通三種に大別される。第一は、古代の朝鮮、中国などから渡來した樂舞（唐樂と高麗樂）。第二は、外国渡來の樂器を用いて、伴奏する新様式の声樂曲で、催馬樂や朗詠など。第三は、わが国の古樂に由来するもので、神樂、東遊、久米舞など。第一と第二は、外国音楽とその影響を受けたものである。

雅樂の樂器は管樂器、弦樂器、打樂器の三種に分けられる。①管樂器……笙、篠篥、龍笛、横笛、高麗（豹）笛、神樂笛、太笛（大和笛）。②弦樂器……琵琶、箏、和琴（大和琴）。③打樂器……羯（鞨）鼓、太鼓、鉦鼓、三鼓、壺鼓、笏拍子。

羯鼓は両手に1本ずつ桴を持ち、両面を打つことが多いが、片面だけを打つこともあるといふ。太鼓には大太鼓と荷い太鼓があつて、大まかなリズムを強調し、右手の桴は強く、他の桴は弱く打つのが原則といふ。三鼓は高麗樂に限って使う樂器で、桴は右手にひとつだけ持つて右の皮面だけを打つ。

イ) 能樂 —— 能樂や狂言において、謡と舞の伴奏をつとめたり、人物の登場、退場のおりに用いられるのを囃子といふ。囃子には能管、小鼓、大鼓、太鼓（あわせて四拍子といふ）の4種、または太鼓を除いた三種の樂器を用いる。これらの樂器を担当する演奏者のことを囃子方といふ。

ウ) 歌舞伎 —— 歌舞伎音楽の一一種<下座音楽>では、三味線、笛、小鼓、大鼓、太鼓のほか、胡弓、銅羅、本釣鏡、摺鉦、双盤、拍子木、四つ竹など多くの樂器が使用されている。

エ) 太鼓踊 —— 太鼓踊は太鼓を打ち鳴らしながら踊る芸能で、全国的に様々な形式

を持ったものが分布している。風流獅子舞、羯鼓踊、かんこ踊、ザンザカ踊、臼太鼓踊、樂打ち、浮立などの名称で呼ばれている。太鼓あるいは羯鼓を踊り手が腰につけて踊る形、横に倒して置いて両面を叩く形、普通に縦に置いて叩く形などがある。

太鼓の音が雷鳴を連想させるところから、雨を降らせるための雨乞踊として機能させるところもある（類感呪術）。盆踊りにも太鼓踊を踊る。災厄や疫病の流行を除く目的で太鼓踊を踊るところもある。

また、大太鼓を苗代田にみたてて、ここに種子を蒔いたり、その周辺で芸能が行われたりする。相撲に太鼓が使われるのも、相撲の芸能的要素を残すひとつの証拠である。

民謡の囃子、万歳、大道芸などの囃子にも使われている。

## [ 五 ]

以上、<鼓><太鼓>について、古文献と芸能の事例をとおしてみてきた。その結果、①鼓や太鼓は、リズムを刻む楽器であること。②鼓や太鼓は、芸能の囃子に欠くことのできない楽器であること。③オモロや神歌、日本古代歌謡では鼓や太鼓は、靈力を持っている呪具としてうたわれている、ということがわかった。

<つづみ>のツツは、靈力・靈魂がその中空部分に宿り込むとしている筒の信仰に關係があろう。古くは害虫や惡靈や敵を威嚇し、これをさけるために、あるいは精靈を活発にするための囃子としても用いられた。『古事記』『日本書記』の<天の岩屋戸>説話をみてみよう。

『古事記』上巻によれば、高天原を統治する天照大御神が弟須佐之男命の乱暴を怒って、天の岩屋戸に身を隠してしまわれたとき、諸神集まって岩屋戸の前で祭祀を催した。その折、天宇受売命が天の香具山から採ったヒカゲノ蔓をタスキにかけ、さらにマサキノ蔓を髪にして、小竹葉（筐）を持ってウケ（汙氣）を覆せて、その上にのぼり、踏みとどろかして神がかりになった。そのままは、胸乳もあらわに、裳緒もホトにおし垂れて、あられもない演技であった。それがおもしろくて、見物の神々がどっと笑ったという。

ここでいう<ウケ>はヲケ、オホケと同義語で、空筈、槽を意味する。書紀には<覆槽>をウケと注記しているし、『延喜式』鎮魂祭の大直神一座のなかに<宇氣槽一隻>とあり、この鎮魂祭には猿女が参加して<御巫及猿女等依例舞>とある。そのウケを音をたてて踏みとどろかしたというから、ウケは太鼓の原始形態といえるのではあるまいか。踏みとどろかすことにより、ウケの中にこもっている神靈を外へ誘い出し、それを天宇受売命かわが身に依り憑かせ神がかりになる（憑靈現象）。そして、その依り憑いた魂を岩屋戸の中に隠れておられる天照大御神に獻じて、復活させるというのがこの祭祀の目的であ

った。神事に太鼓は欠かせない楽器であったのである。

また、ウケの上にのぼったというのは、そこは台であり、そこで足拍子を踏みとどろかしたというから、これは<舞台>というべきものである。芸能史的にみると、ウケは舞台の発生とも深く関っているのである。

鳩間島の旧暦9~10月の行事シチ<節。節替り。年の折目>の晩に、村の井戸（掘り井戸）の近くでオケ（桶。方言：ウーキ）を頭からすっぽり被り、しゃがんでいると祖靈の話し声が聞こえるといわれている。オケの中は、まさに聖なる空間である。

文字をもたない社会では、太鼓によるメッセージの伝達方法<太鼓ことば>があり、人間のことばと基本的な概念の上で同一視されている。

このように、<鼓><太鼓>は実にバラエティーに機能している。今後、<鼓><太鼓>について①材質、皮の種類、形状、桴などの分類。②太鼓の持ち方、打ち方の分類。③打つ目的は何なのか。④太鼓の芸能の分類などを詳細に調査・研究することが必要である。本稿を<序>としたゆえんである。

### 参考文献

- 嘉味田宗栄著 「鼓の『はやし』」『琉球文学発想論』所収 1968年  
池宮正治著 「おもろの『鼓』」『沖縄芸能文学論』所収 1982年  
『日本庶民生活史料集成』第二十七巻 三国交流誌 1981年  
沖縄県立図書館所蔵 『琉球聘使略記』  
『伊波普猷全集 第3巻』 1974年  
京都国立近代美術館編『沖縄の工芸』 1975年  
石垣市立八重山博物館所蔵 「躍狂言并組躍番組」(写本)  
仲原善忠・外間守善編 『校本おもろさうし』 1965年  
仲原善忠・外間守善編 『おもろさうし辞典・総索引』 1967年  
外間守善・西郷信綱校注 『おもろさうし』 1972年  
『古事記 祝詞』(日本古典文學大系1) 1972年  
『日本書紀』(日本古典文學大系67) 1973年  
国立劇場編 『日本の伝統芸能』 1973年  
三隅治雄著 『祭りと神々の世界』 1979年  
仲井幸二郎・西角井正大・三隅治雄編 『民俗芸能辞典』 1983年  
武満 徹・川田順造著 『音・ことば・人間』 1983年



<比地のウンジャミ>  
で鼓を打ちながら神  
歌を歌う神女たち。



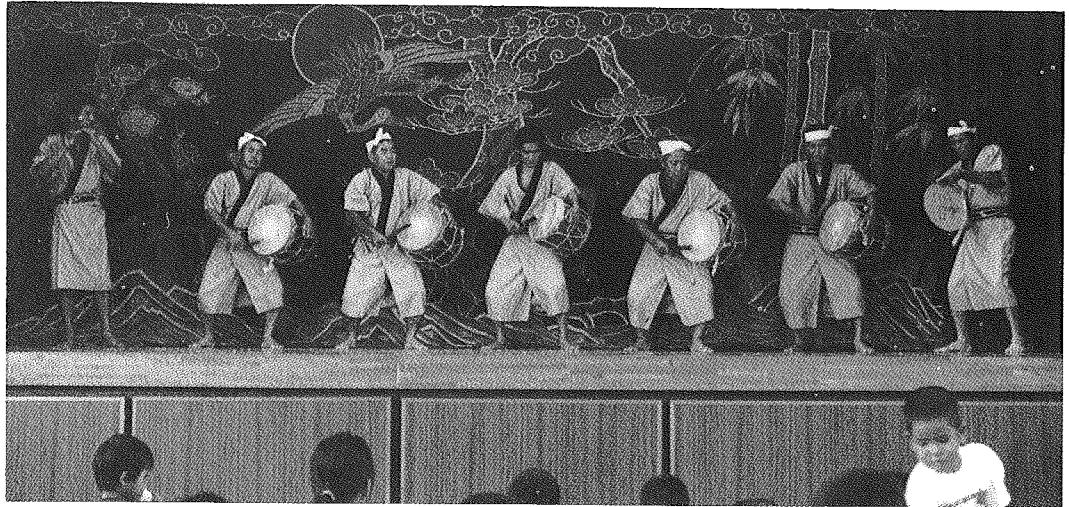
<塩屋のウンジャミ>屋古の神アシャギ  
で鼓を打つ神女。



<久高島のイザイホー>で鼓を打つ  
神女



<塩屋のウンジャミ>ハーリーの衣裳や  
ガーエの鼓の点検をする田港の婦人たち



＜ンヌン＞与那国島の芸能公演開幕の太鼓の演技



沖縄市の＜エイサー＞



嘉手納町＜屋良のチنك＞



石垣市登野城の豊年祭で演じられる＜太鼓踊＞



竹富島の種子取祭で演じられる＜太鼓踊＞

<資料紹介>

## 田名宗經の木彫

津波古聰

(沖縄県立博物館)

<Short Note>

A Few Wooden Sculptures made by Soukei DANA

Satoshi TSUHAKO

(Okinawa Prefectural Museum)

当館に収蔵されている彫刻は石彫と木彫があり、両者とも第二次世界大戦により多かれ少なかれ何処か損傷を受けている。特に木彫はその材質の性質上、虫食い・剝離・破損・褪色等により損傷が甚だしく完全なものは少ない。木彫は円覚寺に安置されていたと思われる仏像や戸板・羽目など建築物の装飾部分が多く含まれている。仏像は釈迦如来座像や観音座像、十六羅漢像などがあり、戸板や羽目などは龍や鳳凰、牡丹唐草の浮き彫りまたは透し彫りの彫刻がなされている。これら木彫のなかに欄間などの隅に取りつけられたと思われる対の小さな彫り物がある。

小さな彫り物は今回はじめて紹介するもので、身は魚で、顔が龍のような形相をしている。二匹の龍は左右から互いに向き合うように対をなした透かし彫りで「魚身変龍隅飾」という。丁度右側に位置すると思われる龍の裏面に「宗経」の銘が刻まれている。この隅飾りの彫り物を中心に当館に収蔵されている「田名宗経」の作品を紹介したい。

### 田名宗経について

当館に所蔵されている「宗経」及び伝田名宗経と言われている作品は、①十六羅漢像が彫りこまれた椰子の実の蓋物、②宗経の作品と言われる龍頭観音像、③同じく龍の彫り物が施されている「雲龍丸型東道盆」、及び④「魚身変龍隅飾」の4点になる。このうち銘

が刻まれているのは①の椰子の実の蓋物（椰子小）と④「魚身変龍隅飾」の2点である。①は「球陽宗經作」で、④は前述のとおり、いずれも陰刻で表されている。彫刻としての技術は高く、精巧を極める。ただ、③の東道盆は他の3点と比べると威圧感がなく、彫り物自体平板である。とともに、全体的にアンバランスな印象を与えるのは否めない。

田名宗經（1798～1865）、唐名を梅帶華と言う。田名宗叙に嗣子がなく、1825年、宗經28才の時、長濱家より養子として迎えられた。喜瀬筑登之慎庸の娘真牛と結婚、長男宗伯、次男宗実が生まれる。後に真牛と離別、与座筑登之親雲上嘉計の娘真亀と再婚し、1832年に三男宗相を授かる。この宗相は父宗經のあとを継ぎ、唐名を梅宏昌と称し、彫物師として活躍する。唯一、顔写真があり、山城正忠は『梅帶華伝』のなかで、「顔の四角は鬚々たる美髯の士で、どこかにひとくせありそうな、天才肌というよりは名匠風な姿貌があると見た。…」と述べ、伝え聞くところによると技は父宗經より優れていたと記している。

宗經は宗珍入道曾孫三世田名親雲上宗和を元祖とし、三男四世宗易を小宗とする。彼はその九世にあたり、十世が宗相となる。つまり、本土からの帰化人で若狭町に移住した日本人の子孫にあたると言われる。（鎌倉芳太郎著、『沖縄文化の遺宝』二彫工芸より）1827年、薩摩に赴き、島津大御隠居様に印籠などを差し上げ、細工物を制作しながら2年ほど滞在している。この間、1828年に法眼七条左京門人・大塔勝造康から仏師職の允可相伝書一巻を譲与されている。1838年、冊封使が来琉。正使林鴻年、副使高人鑑であった。宗經の評判を耳にした高人鑑は彼を訪ね、その技に見入っていた。その時の感想を「中山梅帶華伝」として伝えている。宗經の作品にまつわる逸話は幾つかあり、西洋人の胸像についての話は彼の表現力を伝える好例と言えよう。

彼の作品には小品が多いとも言われ、龍頭、鶴、牛、鹿、仙人、牧童などや版本にも刻字している。1865年、68才で死去。現存する作品には先の当館所蔵の4点と糸満市の蓮華院の「聖觀世音菩薩像」（道光拾一年辛卯十二月琉陽宗經謹刻の銘あり。糸満市指定文化財）や龍彫木宝蔵型印籠（個人蔵）などがある。印籠は他に数点あったと言われるが詳細は不明である。

### 木彫・「魚身変龍隅飾」

左右対のこの隅飾りは朱漆塗りの下地に金泥を施してある。材質は不明。彫りの深い浮き彫りで、一木彫りのような外観である。細部は若干異なるが、左右対象の木彫である。裏面に彫刻はなく、片方の隅飾りに「宗經」の銘が刻まれている。胴部は魚で、頭には鬚のように頭髪が上方へひろがっている。顔面は龍の容貌である。その姿態は右から左へ、あるいは左から右へ下降していくようで、まるで空中を泳いでいるかのように見える。

このような海獣の図柄は、崇元寺本堂の天井画や臨海寺蔵の伝自了筆「渡海觀音図」に

も見ることができる。両者とも今次大戦で焼失して現存しない。(鎌倉芳太郎著『沖縄文化の遺宝』参照) 崇元寺本堂の天井画は「波浪鯱図」で、鯱が翼のように大きく、顔は龍そのもので、瑞雲に囲まれ、波間に飛ぶ姿は荒々しい。一方、三十三観音のひとつ魚藍觀音を描いたと思われる「渡海觀音図」では静かに、しかし確かに觀世音菩薩を背に乗せ、波間を行く魚を描いてあり、顔はやはり龍のような容貌をしている。「魚身変龍隅飾」はこの二つの絵画に描かれている海獣と同類に属すると思われるが、感覚的には「渡海觀音図」の海獣に近い。

「魚身変龍隅飾」は当館の記録によると円覚寺の装飾用羽目板の一部とされている。この木彫は東恩納博物館蔵であったが、首里博物館へ統合された時、収藏された。石川市にあった東恩納博物館は、いろいろな文化財を首里城跡や円覚寺跡及びその周辺から採集・発掘したという。この隅飾りもその時ひろわれたと思われるが、円覚寺にあったかどうかは不明である。

### 木彫・龍頭觀音像

龍の頭頂にのる觀音像を表した来迎形の像である。龍頭觀音は、觀音が衆生済度のため、種々変化し、三十三の化身を生ずると言う民間信仰・三十三觀音のひとつ。像は觀音像、龍の頭、龍の胴体、龍の足、岩と波の台座の各部分からなる寄せ木造りの木彫で、髭の一部に針金のような金属を使っている。全身は朱漆塗りに金彩を施し、龍の口、耳、鼻の中は朱色である。裏面に彫刻はなく、生漆のみで仕上げてある。像全体を正面から見ると三角の形状をしており、感覚的に安定しているが、台座は本体より重い材質を用いているため、物理的にも安定している。觀音像が乗った龍の頭は下降する龍の胴部より前に迫り出しており、台座も前の方へ傾斜している。また、龍の尻尾の先がやはり前方を指すように垂れているため、不安定感はない。

合掌手をした觀音像はほぼ左右対象で、龍の動きのようなダイナミックさではなく、それゆえ觀音像の優美さが強調されている。この作品に記名はないが、現存する作品と比較し、その彫り口から田名宗經の作と伝えられている。

### 羅漢浮き彫り椰子盒子

椰子の実に施された十六羅漢像の浮き彫りである。椰子の実を不定型な山形に切り離し蓋とする。そのため、一々模様を見ながらあわせる必要はなく、切り口をあわせるようになっている。この盒子の腰の部分に「球陽宗經作」の陰刻がなされている。椰子殻を利用したものだが、底部内は円形の板をはめこんである。

羅漢像は蓋の部分に7名、身の部分に9名彫られており、様々な動きをしている十六の

羅漢像からなる。その背景には麻の葉文が隙間なく彫られており、蓋の頂きは龍が彫られている。龍はひとりの羅漢が持つ入れ物から飛び出した様子を表している。図柄の彫りは細かく、十六羅漢人々の衣の模様まで丁寧に彫ってある。髪や頭髪まで毛彫りで表しているのには驚かされる。羅漢像の他には猿、虎、犬の姿も見える。

これら田名宗經の作品をみていくと、銘が異なるのに気がつく。椰子盒子の銘は「球陽宗經作」とあり、隅飾りにおいては「宗經」である。蓮華院の觀世音菩薩像は「琉陽宗經」となっている。鎌倉芳太郎氏の写真撮影メモから黒木彫刻印籠の根付には「琉球宗經」の名があり、龍彫木宝蔵型印籠（個人蔵）には「中山宗經」の名が刻まれている。また1828年に、法眼七条左京門人・大塔勝造康から允可相伝書一巻を譲与された時は「琉陽宗經田名筑登之殿」とある。この相伝書をのぞき、作品に記名されているのは「琉陽宗經」、「球陽宗經」、「宗經」、「中山宗經」、「琉球宗經」の5つパターンがあり、現存するのは先の4点である。

なお、「雲龍丸型東道盆」は蓋に龍の足を彫り、身の周辺に雲龍を表している。この東道盆は蓋と身の塗り・彫りが異なること、身の朱色が漆の発色と若干異なること、また、他の作品と比較して見ると、田名宗經作では疑問点があり、今後の検討事項にしたい。

### その他の彫刻家

琉球における彫物師は中国と交流を始めたころよりあったと思われるが、康熙年間に牧湊親雲上が彫物勢頭に任じられている。その後、多数の彫物師が活躍したと思われるが、資料が少ないため、その多くを知ることはできない。1936年に首里城北殿に開館した沖縄郷土博物館の蔵のなかに若干の彫刻家が紹介されている。

それによると、田名宗經や自了のほかに5名の名前が見える。自了は画家として著名だが、彼の作品として伝えられている短刀が一振あり、雲龍の浮き彫りが刻まれている（鎌倉芳太郎著『沖縄文化の遺宝』参照）。椰子を利用し、寿老人を両面に彫りこんだ印籠の作者中山宗章。猿が樹上より水中の三日月を取ろうとしている光景を表した黒木の彫り物に宗理作の記名が見える。また、宗理は「鬼面」、「貴人面」などの面の作品もあると言う。上與那原朝信は印籠や黒木の雲龍の彫り物がある。朝信のほかに鎌倉芳太郎氏の写真撮影メモによると朝睦の名が見え、親子か兄弟かは不明である。最後に、首里城正殿玄関向拝の雲龍及び牡丹獅子像などを彫った新垣筑登之親雲上があり、18世紀ころ活躍した首里出身の彫刻家と記している。ただ、これら作品は現存しない。

木彫は石彫にくらべてあまり知られてなく、現存する作品も少ない。第二次大戦による焼失・紛失も関係するが、材質上の問題も大きい。木彫は仏教の存在と大きく関わりあっており、寺社の建立により仏像も多数安置されていく。それに影響されたのか他の木彫類

も発展していったように思える。現存する円覚寺や天尊廟の立像類から察すると、仏像は琉球で制作されたものもあったようだが、その多くは中国や日本本土から持ち込まれた物のようだ。ただ、羽目や戸板などの建築物に付随するものは大半が琉球の彫物師の手が多いと思われる。

#### 戦前までにあった田名宗經作木彫一覧

名 称	所在地	法量 (cm)	備 考
大黒天像	臨 海 寺	高さ 7.7	
観 音 像	田名宗華氏		
田名家位牌	々	全長 58.8	
鐘蟠龍印籠	浦添朝顯氏	長さ 8.3	銘「道光24年甲辰琉調」
印籠の根付	牛 島 氏 藏	幅 3.5	印籠は朝睦
鬼 面	尚侯爵家藏	高さ 20.6	
老 人 像	尚琳男爵藏		
雲 龍 印 篠	浦添朝顯氏	高さ 21.1	

なお、上記の表は沖縄郷土博物館の栄（大正14年頃発行）と鎌倉芳太郎氏が大正10年から昭和初期にかけておこなった写真撮影メモ（複写）及び『沖縄文化の遺宝』鎌倉芳太郎著より作成した。

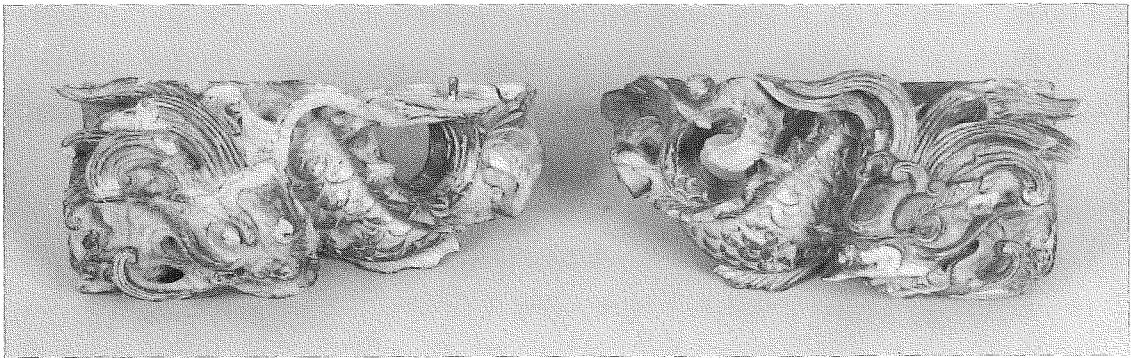
#### 参考及び引用文献

『沖縄文化の遺宝』鎌倉芳太郎 岩波書店 昭和57年発行

『郷土博物館栄』沖縄県教育委員会付属郷土博物館 昭和14年頃発行

『龍頭観音像』（県広報誌おきなわNo.99）西村貞雄 沖縄県 昭和58年発行

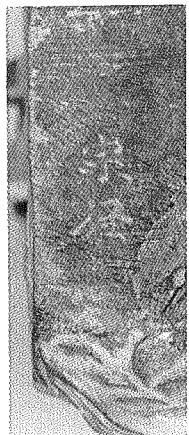
『沖縄一千年史』眞境名安興・島倉龍治 沖縄新民報社 昭和27年発行



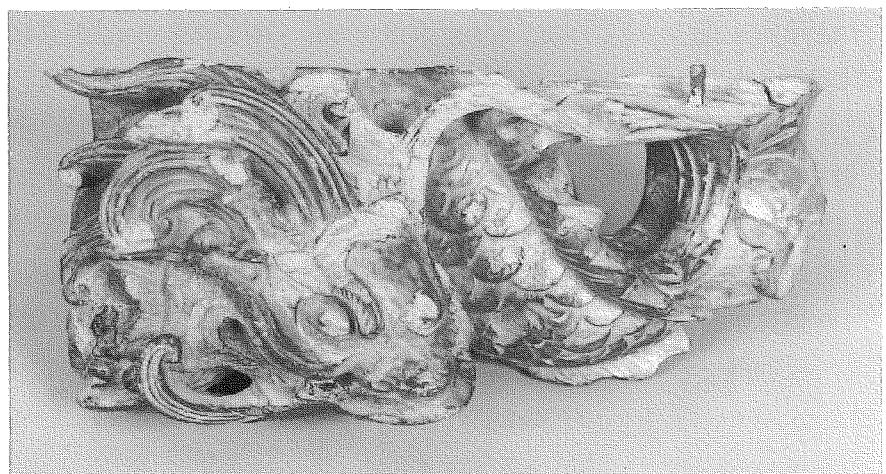
魚身変龍隅飾



同上右部分（縦 7.9cm、横 17.3cm、奥行 6.5cm）



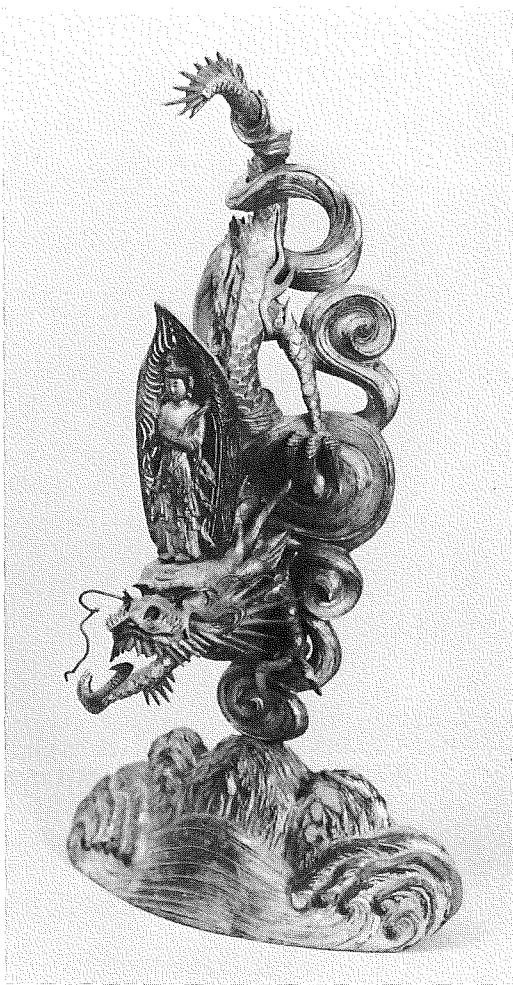
陰刻銘部分



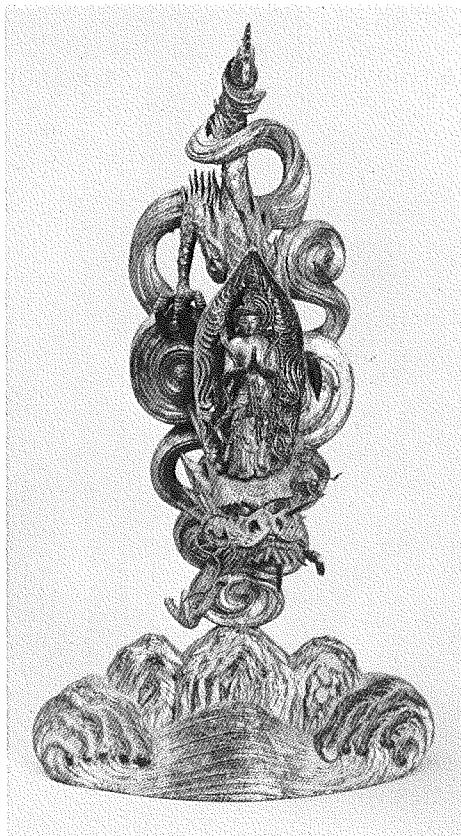
同上左部分（縦 8.1cm、横 18.0cm、奥行 6.1cm）



觀音像部分 [高 11.0cm、幅（光背）5.2cm]



龍頭觀音像  
[高 37.1cm、幅（台座）20.5cm、奥行 11.7cm]



同正面



羅漢浮彫椰子盒小（高 13.1cm、幅径 12.5cm、底径 5.7cm）



陰刻銘部分



雲龍丸型東道盆（高 36.2cm、幅径 32.6cm、底径 31.0cm）

沖縄県立博物館紀要

第15号

1989年3月31日 発行

編集・発行 沖縄県立博物館

〒903 那覇市首里大中町 1-1

TEL (0988) 84-2243

84-4353

印 刷 株式会社 南西印刷

〒903 那覇市首里石嶺町 1-127

TEL (0988) 84-4321

沖縄県立博物館